

「2015 年度春季短期研修報告書」の発刊にあたって

グローバル教育センター長

戸谷 陽子

本報告書は、お茶の水女子大学の 2015 年度春季短期研修派遣プログラムにより、ハル大学（英国）、オタゴ大学（ニュージーランド）、モナシュ大学（豪）、ニューサウスウェルズ大学（豪）、トムスク大学（露）、国立台湾大学（台）の 6 大学で研修を受けた合計 42 名の学生の帰国報告をまとめたものです。派遣先は異なりますが、それぞれに慣れない生活様式や気候、異文化体験を新鮮に受けとめ、いっしょうけんめい勉強し、現地の人たちと交流し、また、おいしい現地の食べ物を堪能して、どの学生もたいへん充実した、そしてかけがえのない体験をし、大きく成長して帰国したことが、生き生きと手にとるように伝わってきます。

本学では、2004 年より海外短期研修を開始しました。当初は英語語学研修プログラムのみでしたが、現在は、英語以外の言語の語学研修や、語学研修にインターンシップを加えたプログラム、派遣大学が開設する正規の専門科目の聴講等、さまざまな選択肢を備えた魅力的なプログラムを提供しています。また、本学が協定をもつ、英語圏の協定大学附属機関で英語の語学研修を受けたり、協定大学の正規授業の聴講することで、本学の単位（コア科目英語）が 4 単位まで認定されることも、本学主催の短期研修の魅力です。さらに、2010 年度春季プログラムから、「インターンシップ科目」1 単位も認定されています。

本学主催の短期研修のもうひとつの魅力は、グローバル教育センターが研修の質を保証できるプログラムを提供していることです。研修の内容を精査した上で、本学と協定を結んだ大学へのみ学生を派遣するという方針、渡航前オリエンテーションおよび「異文化適応」や「危

機管理」に関する事前研修の提供、説明会に加え、前年度研修参加者との短期留学相談会を開催するなど、短期研修の効果を最大限に高める機会を提供しています。研修は比較的短期間ですが、事前準備から帰国後の振り返りまで、きめ細かく一貫したサポートをすることで、研修の体験をいっそう充実したものにするお手伝いをしています。

報告書を読むと、海外で実際に生活することで、さまざまな価値観に触れ、自身の日本人としての視点を求められることを実感し、確実にグローバルな視点や共生の姿勢を獲得して成長している参加学生の姿が浮かびます。大学生生活に留学を組み込むことを考えている学生のみなさんにもぜひ参考にしていただきたいと思います。

本プログラムの企画・運営にたずさわるグローバル教育センターとしても、参加者に充実した体験を提供できたことを実感し、たいへんうれしく思います。短期研修プログラム推進主担当として説明会や事前研修、個人相談等企画から運営まで尽力された AF（アソシエイトフェロー）の李京和先生をはじめ、退職された李先生の後を引き継ぐ形で、短期研修のさらなるパワーアップに尽力されている AF 松田デレク先生にはほんとうにお世話になりました。また、AF 酒井彩先生、特任講師の渡辺紀子先生、長塚尚子グローバル教育センター教務補佐、阿久津典子同教務補佐、お茶の水女子大学国際課職員のみなさんにも、さまざまな形でこのプログラムを支えていただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2016 年 7 月吉日

目次 Table of Contents

2015 年度春季（2016 年 2 月～3 月）研修の概要	1
研修参加者の報告	3
University of Hull (UK).....	3
Monash College (AUS)	27
University of New South Wales (AUS).....	39
University of Otago (NZ).....	61
Tomsk State Pedagogical University (RUS).....	77
National Taiwan University (TWN)	83
研修参加者からの Advice& 研修先での Tips	88
University of Hull.....	88
Monash College	91
University of New South Wales	93
University of Otago	96
Tomsk State Pedagogical University.....	99
National Taiwan University	102

2015年度春季（2016年2月～3月）研修の概要

University of Hull（イギリス）

期間：2月14日～3月23日

滞在：学生寮

参加費：文系コース 約605,000円（授業料＋旅行代金＋宿泊代など）

理系コース 約675,000円（授業料＋旅行代金＋宿泊代など）

奨学金16万円支給



研修内容

<文系コース>

①週20時間の英語コース ②イギリス文化研究コース ③HULL大学正規学部科目の聴講 ④HULL大学日本語クラス参加 ⑤現地小学校の訪問

<理系コース>

①週20時間の英語コース ②理系英語コース ③HULL大学正規学部科目の聴講 ④HULL大学日本語クラス参加 ⑤現地小学校の訪問

コア英語4単位認定

Monash College（オーストラリア）

期間：2月14日～3月22日

滞在：ホームステイ

参加費：約620,000円（授業料＋旅行代金＋ホームステイ代など）

奨学金14万円支給



研修内容 ①東北・一橋・埼玉・東京学芸・名古屋・大阪・九州大学の学生とのジョイント英語研修

②お茶の水女子大学学生向け、特別プログラム

『デバート・ディスカッション』題材：「豪日比較文化」

③現地モナシュ大学日本語クラスへの参加

④現地メルボルンの学校訪問

⑤フィールドトリップ

⑥ホームステイ（食事付き）

コア英語4単位認定

University of New South Wales (オーストラリア)

期間：2月14日～3月29日 滞在：ホームステイ

参加費：約715,000円（授業料＋インターンシップ代＋旅行代金＋ホームステイ代など）

奨学金14万円支給

研修内容：①4週間の英語コース（アカデミック・イングリッシュ）

②2週間のインターンシップ（今年度は現地高校で日本語アシスタント）

③ホームステイ（食事付き）



コア英語4単位認定

University of Otago (ニュージーランド)

期間：2月14日～3月31日 滞在：ホームステイ

参加費：約750,000円（授業料＋インターンシップ代＋旅行代金＋ホームステイ代など）

奨学金14万円支給

研修内容：①オタゴ大学付属語学センターでの英語研修

②オタゴ大学での正規授業聴講

③インターンシップ

④ホームステイ（食事付き）



コア英語4単位認定

Tomsk State Pedagogical University (ロシア)

期間：2月16日～3月7日

滞在：大学寮

参加費：授業料免除、大学寮滞在費（食事抜き、自炊）無料、登録費3000RUBのみ（約7500～8000

円：2015年度2月現在）、航空券・個人滞在費用・海外保険などは各自負担、奨学金7万円支給

研修内容：72時間の集中ロシア語・文化セミナーとワークショップコース

2ECTS（欧州単位互換制度）取得、海外交換留学認定科目4単位認定



National Taiwan University (台湾)

期間：2月29日～3月21日

滞在：ゲストハウス

参加費：申込料＋授業料＋滞在費＋海外保険料 \$2460（約300,000円、2015年度2月現在）航空券・食

費・交通費などの個人滞在費用は自己負担、奨学金11万円支給

研修内容：中国語・中華文化春季集中プログラム（日本語・英語で授業）

海外交換留学認定科目2単位認定






UNIVERSITY OF Hull

参加者 13 名

ハル大学短期研修を終えて

理学部 化学科

1年 伊藤 陽香

大学では主に、通年で英語を学んでいる留学生の授業に参加しました。強く印象に残っているのは録画した自分自身のグループディスカッションから反省点を見つける活動です。自分のつたない英語を自分で聞くのは心臓に悪いものでしたが、先生から発音の苦手箇所や正確さと流暢さのバランスなど、細かいアドバイスをいただけたのでとても参考になりました。特に発音については、指摘を受けてからは日常会話の中でも気になるようになったので、現地の学生に教えてもらって何度も練習していました。また、自分の専攻や興味に合わせて空いた時間に好きな授業や講義に参加することもできました。有機化学と分析化学を聴講しましたが、正直半分も理解できませんでした。英語力はもちろん化学に関する知識も足りていなかったように感じ、帰国後に専門科目を少し復習しなおそうと思いました。基礎は日本での講義と同じでしたが、演習問題などが何度も出てきて、より実践的な内容だと思われました。具体的には何をしていたのか理解しきれなかったのが心残りではあるので、英語で化学の講義を聴けるようになる、というのが新たな目標のひとつとなりました。

学校外での時間は、ハル大学のジャパニーズソサエティのメンバーが企画してくれたイベントに参加していました。ただ、現地の学生と話していると、どうしても会話を躊躇してしまう場面が多かったので、せっかくの機会を無駄にってしまったと思うところもあります。イギリスにいるとは言っても、自分から使おうとしなければ英語で話す機会を失ってしまうということを知り、積極的に英語を学び、人と関わろうとする姿勢を保てるようにする必要があると痛感しました。また、卒業後



の進路や日本の政治や教育制度について聞かれたものの上手く答えられなかった、という経験もしました。イギリスを含め、日本よりも自己表現を重視する国が多いなかで、語れるような自分の考えや経験を養うこともコミュニケーションに重要だと感じました。

5週間の留学を終えて、英語力の他にも自分の至らなさをたくさん思い知ることとなりましたが、それはこの経験が有意義であったことを示す結果だと思っています。同時に、また留学に行きたい、次こそ上手くやりたいという欲も出てきました。数多くある反省点にじっくり取り組んで、いつか次の機会に備えていこうと思います。

ハル大学での研修を振り返って

文教育学部 人間社会科学科教育科学コース

2年 卯田 ひとみ

研修プログラムの概要

- ・ 場所：イギリス ハル
- ・ 期間：5 週間
- ・ 研修内容
 - ① 週 20 時間の英語の授業
 - ② 主に日本語を学習している現地の学生との交流
 - ③ 現地の小学校訪問
 - ④ ハル大学正規学部科目の聴講



①週 20 時間の英語コース：1 講義あたり 2 時間、それが週に 9 コマあり、加えてオンライン学習が週 1 時間となっていた。授業は現地の年間の留学生の英語クラスに短期で参加させていただく形式で私のクラスの人数はお茶大生 6 人を含め合計 13 人。詳しい話しは聞かなかったが、サウジアラビア出身の女の子の学生にはイギリスに家族と住んでいて子育てをしていた方が数人いた。私が 20 歳と言うと、彼女たちは驚き「まだ 20 歳で日本の大学に通いながらこっちに来たの？」と言われたことが印象的だった。このように国籍、年齢や生活などが異なったクラスメートと共に英語の授業を行った。学習内容としては授業 4 種類とオンライン学習があったがその中の 3 つの内容を簡単に振り返る。

*コミュニケーションの授業：2 つのトピックに沿って、関連することの listening やペアワークでの

↓ discussion の様子



speakingなどを土台に、まとめとして discussion をした。最初はペアワークでさえも自分の意見が言えず、ペアの話しを聞くのみであったが、先生やクラスメートが「ゆっくりで大丈夫だよ？」と励ましてくれ、少しずつ積極的に話せるようになった。discussion では、話せるだけでも聞けるだけでも成り立たないことに気づき、聞いて自分の意見を生み出すことの必要性を感じることができた。

*writing/reading の授業：教科書に沿い、テーマが設けられていて、それに関する文書を読み、問題を解き、その後エッセイを書いた。エッセイを書く時のルールやより学術的な表現になるような文法などを学んだ。また、この授業の中でエッセイを書く際にはただ自分の意見を述べるのではなく、あらかじめ情報を入手し十分な知識を備え、考えた上で書くことが大切だと感じた。

*イギリス文化の授業：あるイギリス文化の教科書を 1 章ずつ進めている中で、私たちは主に「教育」をテーマに学習した。しかし、イギリスの教育を一方向的に学習するのではなく、現在のイギリスの教育方針についてどのように感じるか、自分たちの国の教育を互いに話しながら考えた。例えば、学校内での罰や、家庭教育、制服の賛否な



どについて話した。イギリス人の先生、サウジアラビアや中国の学生の意見を交わし日本の学校教育について話したりすることができ、刺激的で新たな視点を持つことができた。最後には、日本の文化について一人10分程度のプレゼンをした。



②主に日本語を学習している現地の学生との交流

日本のアニメや漫画が好きな人が集まるサークル Japanese society の方や大学の授業で日本語を学習している学生と授業外で交流することが多かった。その中で一人あたり4,5人ほどタンデムパートナーと呼ばれる学生を大学の先生が手配してくださった。タンデムパートナーでない方々ともイベントで話したり友達を介して数人で会い話したりすることができた。最初は話についていけず、何を言えばいいのかもわからず戸惑っていたが、1対1など少ない人数で話すように心がけ徐々に会話をするできるようになった。

パートナーとは個人的に連絡を取り、大学内や街のカフェで食事をしたり、博物館や水族館に行ったりした。授業外で英語を話すためには、なるべく多く会うことが必要だったため、授業後や空いている時間などをフルに利用していた。中でも貴重な体験だったことは、互いに授業の宿題の質問をし合ったことだ。日本語の質問では、いつも何気なく使っているため答えられないことも多く、また「イギリス人にとって日本語は構成も言葉も発音も違いすぎるから難しい」という言葉が私の英語の学習において刺激になった。私は、リスニングのスク립トの宿題やエッセイ、プレゼンのスク립トなどを見てもらった。自分が書いていることをさらに詳しく話すことや今まで知らなかった表現を教えてくださいましたことで濃密な時間となった。



③現地の小学校訪問

平日の丸1日、電車で30分ほどの街の小学校に訪問し、日本の文化の一つである着物(浴衣)の着付けと書道の体験教室を開いた。私が担当した日本語の文字を書くだけでなく、絵の具と墨の違いを感じている子どもや「筆の感覚がいい」と線を描いている子もいた。数人の男の子は漢字がかっこいいと言っていたのが印象的だった。また、小学校の給食をいただくことができ、小学生と同じように食堂で一緒に食べた。私は11歳の女の子たちのテーブルに入り、なぜ給食を食べている子とお弁当を持っている子がいるか、19+2は何か、日本のシンボリックな動物は何かなどの話をした。人見知りのしない彼女たちは私たちを教室まで案内してくれ、昼休みの時間も子どもたちと触れ合い、文化交流をすることができた。



最後に

研修内容を元に、学んだことやその時特に印象に残ったことを振り返ってきた。研修を通じて、英語力の向上に加え、文化交流ができたことやコミュニケーション能力が向上したことがこの研修ならではの感じた。

英語が苦手だった私が留学で学んだこと

理学部 情報科学科

2年 漆原 理乃

きっかけ

中学生で初めて英語の勉強をし始めてから大学1年生まで、英語は私の一番苦手な科目でした。英語ができないことにコンプレックスを感じ、英語が大嫌いでした。しかし、大学2年生の夏、友人に中学・高校生向けの国際キャンプのスタッフに誘われ、日本人と外国人をつなげるキャンプの企画・運営をし、英語を話すことの楽しさ・日本にはない異文化の面白さを知りました。「これからの人生を楽しく過ごすために、自分の視野を広げたい!」「外国人と楽しく会話ができるようになりたい!」と思い、夏から英語の勉強を再スタートしました。再スタートし始めてから日本では独学で勉強していても、「実際にこの勉強法が正しいのか?」「本当に話せるようになるのか?」など不安なことがたくさんあったため、自分の英語のレベルを理解し、新しい英語学習方法を見つけるために留学を決意しました。

留学中の生活

留学中は、先ほど述べた「英語の新しい学習方法を見つけること」と「初めての外国での生活を楽しむこと」を目標にしました。実際に生活で経験したこと・学んだこと・考えたことを様々な切り口で述べていこうと思います。

① Hull 大学での英語の授業

サウジアラビア人や中国人の留学生と一緒に、週に 20 時間の英語の授業を受けました。普段英語に触れていない私にとって初めは大変辛いものでした。全てを理解するのが難しく、宿題が出されていても聞き取れず何が宿題なのかわからない、クラスメイトが先生のジョークで笑っていても何が起きたのかわからないということが多くありました。けれどもだんだん慣れ、先生の言っていることも大半理解できるようになり、授業についていけるようになったことが嬉しかったです。文章の中でわからない単語があったときに推測する力やアカデミック・ライティングなどが学べました。

② Hull 大学での Computer Science の授業

Hull 大学の正規の授業を聴講しました。私の専門の Computer Science の Network と C#での Programming の2つの授業を聴講しました。Network の授業はちょうど2年の後期に学んだことだったので、復習と英語ではどういう風なのかというのを学びました。C#でのプログラミングは初めてで、わからないことも多かったのですが、現地でできた友達に教えてもらい、簡単なアプリ制作までできるようになりました。英語の授業とは違って、先生が超早口なので、初めは本当に聞き取れず泣きそうになりましたが、最後には5割6割くらいはわかるようになっていました。

③ Language Exchange Partner とのコミュニケーション

Hull 大学の日本語を勉強する学生と一対一のペアになり、お互いの言語を教えあいました。助詞の使い分けなど日本語の難しさに気がついたと同時に、敬語の仕組みや擬音語・擬態語など英語にはない日本語の良さにも気づけました。パートナーが頑張って日本語を勉強している様子を見て、大変刺激を受けました。語学の学習という点において、言語は違えども学習の仕方は同じなので、彼らの学習方法を学べて良かったです。とても参考にしようと思います。

④ イギリス観光

Japanese SocietyのメンバーにYorkとBeverleyに連れて行ってもらったり、Language Exchange Partnerと寮の近くの水族館『Deep』に行ったりしました。一緒にお茶大から来ていたメンバーと現地のツアーでYorkshire Dalesにも行きました。最終の週にはLondonにも行きました。5週間とは思えないほどたくさんの場所に観光に行きました。

⑤ 寮での一人暮らし

実家暮らしなので一人暮らしは初めてでした。イギリスの変な形のキャベツで自炊したり、カップラーメンのまずさに驚いたり、とても楽しかったです。一緒にお茶大から来たメンバーには朝起きれなかった時には本当にお世話になりました。

⑥ Selby での小学校訪問

Selby の小学校に授業をしに行きました。日本文化を紹介ということで着物と書道の紹介をしました。アルバイトで小学生と関わっているけれど、どの国の小学生もあんまりかわらなく、かわいいと感じました。特に着物を来た外国人の小学生はとてもかわいかったです。

最後に

1年前まで英語が嫌いだったことが嘘のように、たくさんのことが学べ、充実した留学生活でした。目標にしていた「英語の新しい学習方法を見つけること」は **Language Exchange Partner** と接することや英語の授業で学んだことで達成できました。また「初めての外国での生活を楽しむこと」という目標は、Hull 大学の **Japanese Society** のメンバーの方々、**Language Exchange Partner** など、たくさんの関わりの中で充実した生活が送れたので達成できたと思っています。これからもこの留学で学んだことを意識しながら英語の勉強を頑張っていきたいと思います。



ハル大学研修を終えて

文教育学部 人文科学科

1年 松下 由季

5週間のイギリスでの生活は刺激に満ちたものであった。今回の留学を経て私が感じたことを紹介したい。ハル大学には様々な国から学生が来ていて、一口に英語と言っても様々なイントネーションや訛りがあった。ブリティッシュイングリッシュだったり、中国訛りだったり、サウジアラビア訛りだったり…。最初はその違いに戸惑いあまり会話が成立しなかったが、5週間いろんな英語を聴き続けるとだんだん会話ができるようになっていき非常にうれしかった。英語にも様々な種類があること、そして皆自分たちの英語に自信を持っていることに気付いた。もちろんきれいな発音であることに越したことはないが、自分の話す英語にもっと自信を持ってもよいのだなと感じた。また、一緒に授業を受けていた中国やサウジアラビアからの留学生は、文法は間違っていたとしても積極的に発言していた。まずは発言しないことには自分の意思は伝わらないし、発音などの修正も図れない。この研修を経験したことで、口を開いて英語を話そうとすることに抵抗を感じなくなった。また授業では、わからない単語があるとその単語を別の単語で言い換えたりした。この訓練によって語彙力もアップしたとを感じる。さらに勉強になったのは、授業の中でディスカッションの様子を録画して先生からフィードバックをもらうというというものだ。自分の様子を客観的に見ることで、自分の弱点が明確になり次回はいまよりどうしようかなどというように改善していくきっかけとなった。



週末には観光に出かけた。Japanese society の人と Beverley や York に行った。また日本人だけで London にも行った。London に行つてミュージカルを観るということは私の1つの夢であったため、叶うことになり幸せだった。Japanese society の人たちはたくさんのイベントを企画してくれた。その誘いを積極的に受けみんなと交流することで、授業以外でも英語の勉強をすることができた。

短期留学は、自分次第でどこまでも変えられると感じる。私は舞台が好きで、将来もそういうことに携わっていきたいと考えている。私にとって英語を勉強する意味は、英語の作品（舞台や映画など）の本来のニュアンスをとらえられることだ。日本で海外の作品を上演するときに、翻訳を経て上演されることが多いが、やはり日本語になると少しニュアンスが変わってしまうと思う。留学中も、これは日本語ではうまく表せないなと感じることも度々あった。私は演じるならきちんと原作の意味を理解したうえで演じたいため、今後も英語の勉強を続けていきたいと思う。

祖父に進められて決断した留学。たくさんの人に支えられて、素敵な経験をする事ができた。留学を終えて日本に帰って来た時は、周りに英語があまりなくて寂しくなったほどだ。帰国してからも何度か外国人と会話する機会があったが、物おじせず自然に話すことができるようになっていた。この貴重な経験を忘れることなく、さらに上を目指して頑張っていきたい。ハルで知り合った人の中には、今度日本に来ると言ってくれた人もいたため、その時は皆がしてくれたように、今度は私があたたかくおもてなしをしたい。

ハル大学研修を終えて

文教育学部 芸術表現行動学科音楽表現コース

1年 松尾 早菜子

高校生の時から、大学に入ったら留学したいという希望を持っていたのですが、今回それを叶えることができました。海外での生活はどんな感じなのだろう、今まで机の上だけで勉強してきた自分の英語はどこまで使えるのか。一人で生活もしたことのない私にとってこの留学は自分への挑戦でもありました。5週間という限られた短い間には、日本では経験できないようなこと、新しい発見、多くの人との出会いがあり、どれ一つ取っても私にとって非常に貴重な体験となりました。

Hull の街並み

初日の朝、部屋の窓から外を見ると見渡す限りレンガの家のみ。街を歩いても映画でしか見たことのないような建物に、活気ある人々、路上で楽器を演奏する人、大声で野菜を売る人など、新鮮な光景ばかりが目に飛び込んできました。時間の流れが遅く感じるような、素敵な街でした。ハル大学は想像以上に大きく、学内が一つの街のようで伝統ある建物、近代的な建物を始め、7階建ての図書館、レストラン、パブ、美容室までありました。自然に囲まれたキャンパス内は生徒にとって学びやすい環境にある大学でした。



大学での授業について

私たちは第二言語として英語を学ぶ人たちの授業に参加しました。同じクラスには中国人、サウジアラビア人など合計 15 人いました。当然のことながら日本語は通じない環境の中での他国の人とのコミュニケーションは簡単ではありません。何を言っているか分からない時があれば、伝わらないこともある。だからこそお互いが意思疎通できた時は本当に嬉しかったです。週 20 時間の授業の中で環境問題、ネットワーク、肥満、イギリスの教育の歴史、制度など様々なテーマをもとに、文献を読んだり、資料集めをして発表したり、essay を書いたりしました。研修中に、15 分間グループで一つのテーマについて話し合う discussion を 2 回行いました。これは自分の意見を伝えるのはもちろんのこと、話し合いのために他人の発言も正確に聞き取らなければなりません。英語を話すことに慣れていない私はただただ必死に会話についていくという感じでした。大学の先生方もとても優しく、どんなに授業が中断しても、生徒の意見や質問に対して倍以上の説明をくれます。生徒との距離が近いのでとても親密な仲になれます。

Hull で出会った人々

日本人を象徴するものが礼儀正しさ、謙虚さであるならば、イギリス人を象徴するものは間違いなくオープンさとフレンドリーさだと感じます。バスを降りる時にだれもがドライバーに **thank you** と声をかける、知らない人でも目があうとにこっとしてくれる、たまにしか会わない人でも **How are you? Are you Okay?** と気軽に声をかけてくれる。そんな光景に最初は驚きと感動を覚えました。私はそんな国民性がとても好きです。Hull 大学には **Japanese society** という集団に属する日本に興味を持っている人たちがいて、そのメンバーたちが私たちとの交流の場をたくさん設けてくれました。毎週何かしらのイベントがあり、**welcome party** に始まり、ボーリングをしたり、パブ、水族館に行ったりもしました。**Japanese society** のメンバーとの出会いは私たちにとってかけがえのないものとなりました。また、ハル大学には **tandem partner** という制度があり、私たち一人一人に数名の現地学生が配置され1対1で **language exchange** をするというものがありました。私はパートナーと大学内のレストランでおたがいのことについて話したり、英語を教えてもらったりしました。お互いの距離が近い分、会話のスキルアップにはとてもいい機会となりました。

休日の過ごし方

滞在中、Beverley、York、London に行きました。市場が立ち並ぶ小さな村 Beverley から、見所多い London までとても充実した休日を過ごしました。**Japanese society** のメンバーとはバレンタインにチョコ作りをしたり、お好み焼き、鍋、寿司をつくって食べたりしました。

まとめ

この研修で、私が何年間も勉強してきた英語がいかに読み書き中心だったかということを感じました。英語での会話は神経を使うし、最初の頃はすぐに日本語で助けを求めてしまう自分がいました。しかし最後の一週間は会話が楽しいと思うようになっていました。このことは、より英語を学びたいと思うきっかけにもなりました。またイギリスは多国籍国家のため、様々な国の人と交流できるので、様々な価値観に出会い、自分の視野を広めることもできます。この研修で学んだことをこれからの大学生活に生かしていきたいです。



イギリス・ハル大学での語学研修プログラムを終えて

文教育学部 人間社会科学科心理学コース

2年 河上 佳乃子



授業内容

ハル大学での英語の授業は、Speaking と Listening を扱うもの、Reading と Writing を扱うもの、イギリスの文化を扱うもの、オンラインで学習するものに分かれており、合計週 20 時間が確保されていました。さらに、興味のある分野の授業を聴講することができました。このうち、Reading、Writing、Speaking/Listening、British Culture はアジア系の留学生と一緒にのクラスでした。英単語の覚え方1つとっても、collocation で覚えることや単に和訳を知っていればいいわけではないことなど、当たり前のようですが、改めてその大切さに気付きました。ディスカッションやプレゼンテーション、エッセイなどをイギリス人の先生に見てもらって、アドバイスをもらえたことは、本当に良い経験になりました。特に、ディスカッションで録画したビデオを見ながら、イギリス人の先生に、発音の癖や発言の仕方など、反省すべき点を教えてもらえたことは、今後の学習にもつながると感じました。また、ハル大学の心理学と日本文化の授業にも、聴講という形で参加することができました。日本で習った認知心理学を、同じ内容の英語で聞き、専門領域の英語表現を知ることができました。また自分のいる文化が外国ではどのように紹介されており、どう考えられているかを知ることができました。

課外活動

授業外では Tandem Partner と呼ばれる日本語学習者を Language Exchange Partner として 4 人とさせていただき、日本語を教える代わりに英語を教わりました。Lunch Time Drop-in として日本語学習者からの質問を予約不要で受け入れる機会も 2 度設けていただきました。3 月 9 日には、Selby にある小学校を訪問し、日本の文化として着物と書道を紹介しました。子どもたちに浴衣を着せた時には、とても喜んでもらうことができ、やりがいを感じました。

イギリスでの生活

普段はアメリカ英語を学習しているため、最初は慣れないイギリス英語に戸惑うことが多くありましたが、頻出の単語には慣れることができました。寮での自炊生活も、日本と同じような新鮮な野菜や肉、魚がなかなか手に入らず、厳しいものでしたが、限られた食材と調理方法の中で何とか料理することができました。また、日常的な会話表現やメールの送り方など、普段学校では深く習うことのないものですが、現地の大学生や先生方とのやりとりを通じて学ぶこともできました。現地では、Japanese Society という日本の文化が好きなグループの方々が、日常生活やレクリエーションをサポートしてくださいました。滞在中に 4 回あった週末は、とても充実していました。Beverley や York、Yorkshire Dales 国立公園、London とたくさん所に行きました。Language Exchange Partner と the Deep という水族館にも行きました。London の滞在期間は約 1 日半と短かったため、色々回ったのですがもう一度行きたいと思っています。



Hull へ行って私が得たもの

生活科学部 人間・環境科学科

1年 大村 あずさ

私が春季語学研修の存在を知ったのは、書類提出締め切り日の1週間前でした。前々から英語を話すことが好きで、海外留学をいつかしてみたいと漠然とは思っていましたが、それ以上のことは何も考えていませんでした。しかし、短期留学のチラシをもらったとき、一瞬で行こうと決めました。4年間しかない大学生活はすぐ終わる、1年生の間に何かしらの一歩を踏み出したいと思ったのです。そしてその一瞬の決断は、今後の大学生活を、さらには私の人生を大きく変える決断になったと、今は思います。1歩どころか、2歩も3歩も進めた気がするからです。ここに書ききれないほどの沢山の経験をしましたが、イギリスでの生活で、特に私に影響を与えてくれた2つのことについて述べたいと思います。

・ハル大学での授業

まず驚いたのは、日本の学習スタイルとはまったく違うことです。授業は先生がするものではなく、生徒とともに作っていくものであると感じました。テキストのトピックに対しては毎回アクションを求められ、ペアワークでは相手の意見を理解し、また自分の考えを分かってもらわなければなりません。私は、英語を話すこと自体が好きで、幸い日本語ディベートの経験もあったので、すぐに馴染むことができました。次第に間違いを過度に恐れることもなくなり、また、間違いからいかに多くのことが学べるのかも知りました。英語でのディスカッションは計2回ビデオ録画をし、2回目では進行役にもチャレンジしましたが、1回目と比べて明らかに良くなっていたので自信にもつながりました。

私たちのクラスにはサウジアラビアからの生徒と、中国からの生徒がおり、日本人を含めそれぞれが違った価値観を持っているので、イギリスだけでなくより多くの文化を感じられたことも、大きな収穫でした。自分がいかにステレオタイプにはまっていたか、知るきっかけにもなりました。また、彼らの学習意欲は非常に高く、勉強できることの幸せや、知らないことを知る喜びも思い出させられました。



York Minster: イギリスにはゴシック建築が数多く残っています。

・ハル大学の友達

今回の短期留学で得た一番の財産は、沢山の最高の友達です。Japanese Society というサークルに入っている学生は、みんな日本が大好きで、本当に仲良くなりました。学校で空きコマがあれば学内のカフェでおしゃべりをし、週末は Hull の博物館に行ったり、お家に招待してもらってボードゲームをしたり、特に仲良くなった女の子とは2人で Manchester へ買い物にも行きました。彼女と私は共にファッションやメイクが大好きで、好きなことについてとことん英語で話せたことはとても思い出に残っています。日本でも、YouTube で海外のメイク動画を（もちろん英語で）たくさん見ていたことが、会話の中で少し役に立ちました。



お家にも招いてくれた、私の大好きなカップル。左の彼は、好意で私の専攻である建築についてレクチャーをしてくれました。

研修中に宿泊していた学生寮のフラットメイトとも、帰国後も定期的に連絡を取り続けるほどいい友達です。週末の party に入れてもらい、積極的にいい関係を作ろうと努力しました。ただ、彼らの言葉はスラングが多く、話すのも早いので最後まで聞き取るのが難しく、それは一番悔しかったことでもあります。意味がわからないときは聞き直したりすることでなんとかコミュニケーションをとっていましたが、彼らの言っていることをそのままのニュアンスで理解して、スムーズに会話できるようになることが私の目標になりました。本物の英語はこんなに分からないものかと、とにかく悔しかったです。

数年以内にまた必ず Hull を訪ねたいと思っています。もちろん今回出会えた最高の友達に会うためです。それまでに、見違えるくらい英語が上達した自分になりたいです。

イギリス、ハル大学での短期研修を振り返って

文教育学部 言語文化学科

2年 中川 舞子



本初子午線、グリニッジにて

学習について

私が留学を決意したことに、確固たる理由はなかった。英文学を専攻する者として一度はイギリスの地を踏み、その雰囲気味わってくるべきなのでは、という漠然とした思いから、ハル大学での短期プログラムに参加することにしたのである。ただ、参加にあたって自分なりの目標を立てた。それは、①英語のライティングの練習として Facebook を週に 5 回以上更新すること、②英語で会話するにあたり、自分の返答を Yes / No で終わらせず、

2 文以上の文章にすること、の二つである。結果はというと、①の Facebook の更新はまるでできなかった。留学中の合計でも 5 回にいくかいかないかといったところであった。恐らくこれは学校の他の課題に追われていて忙しかったせいだろうと思われる。ハル大学ではライティングの授業があり、エッセイの書き方について学び、自分でもエッセイを書き、添削してもらうことができた。英文コースに所属した者の定めとして、卒論を英語で書くという課題が待ち受けている身としては、これは非常にありがたかった。この授業で身についたスキルは確実に、将来の自分の助けになるだろう。そして、もう一つの目標である返答を文章にすることについては、それなりに達成することができたように思える。ハル大学には、日本語を学んでいるハル大学の生徒と英語を学びにきた日本人留学生を組み合わせ、互いの学習を助け合う Language Exchange Partner と呼ばれるシステムがあった。彼らとの会話の中で自分の好きな映画や休日の過ごし方、日本語の動詞の活用から日本のアニメについてまで、様々な質問を受け、またそれに答えた。最初のうちは「2 文以上、2 文以上」と頭の中で唱えながら必死になって受け答えをしていたが、そのうち「あれも話したい、これも教えてあげたい」と考えるようになり、自然と言葉数が増えていったように思う。英語のスピーキング能力を伸ばすのなら、英語話者と会話するのが最も効果的であって、そのためには Language Exchange Partner はとても良い制度であったと思う。目標を 100% 達成できたわけではないが、充実した英語学習ができたことは確信している。

その他

学習以外の点について言えば、ブリテン島内の観光は思い出深い。最初の週は Beverley と York、第三週は Edinburgh、最後の週は London へ行った。それぞれで異なる文化に触れ、よりイギリスに対し興味・関心を覚えた。またそれだけではなく、日常の生活の中でも、街中に存在する商店の様子やパブでの振る舞い方など、日本で本や映画を見るだけでは味わえない文化を現地で自ら体験したことで、これからの自分の専門分野の学習に対する意欲が高まった。

また、英国では日本よりもはるかに、「外国人」に出会う機会が多い。日本では外国人というと未だに珍しいような気がしてしまうが、イギリスではそんなことを言っていられないほどに様々な国籍、人種



ロンドン、セント・ポール大聖堂からの眺め



ステーキキドニーパイ、Beverley にて

の人々と触れ合った。授業は中国とサウジアラビア出身の生徒たちと同じクラスだったし、5人いた Language Exchange Partner のうちの2人は英語を第二言語として話す、香港人とブルガリア人だった。彼らからは英語やイギリスについてだけでなく、彼らの母国についての話も聞かせてもらい、イギリス文化だけではなくその他の国の文化をも体験できた気分になった。

観光や人々との交流においては、英語は「勉強する対象」ではなく「交流の手段」であった。観光においても、人々との交流においても、会話は必要なものであり、英語は会話に必要なものである。たとえ母語が異なっていようとも、英語によって会話することができる。当たり前のことだが、留学を経験して改めて思い知った事実であった。イギリス

に置いてきた心残りは多々ある。英語を上達させ、そして再び戻ることができるようその学習に励みたい。

ハル大学春季短期留学を終えて

文教育学部 グローバル文化学環

2年 中島 実来

イギリスについて初日から、ハル大学の **Japanese Society** というサークルの学生が迎え入れてくれ寮の部屋や共同スペースについての説明、寮の周辺の案内をしてくれたため、不安なく研修生活を始めることができました。大学初日に私たちの担当の先生にお会いしましたが、はっきりとした発音でゆっくり話してくださったので非常にわかりやすく、とても親切にしてくださいました。授業が始まると、同じクラスの、サウジアラビアと中国からの留学生と混ざって積極的に自分から授業に参加することが求められました。日本での先生が一方的に話して発言は指名制がほとんどという状況とは異なり、生徒同士で話し合い意見交換をして、自分がわかるところは自由に発言していくというスタイルだったため、いかに自分から参加していくかという姿勢が尊重されていたように思います。私は一回の授業で少なくとも3回は発言しようとして決めて取り組んでいましたが、クラスでは自由に発言できる環境が整っていたためあまり気負わずに発言できるようになっていました。ただし、聴講としてとっていた学部授業は非常に難しく、インターナショナルクラスが英語学習者への授業であることと自分の語学力のなさを情けなく感じる事が多くありました。私は今年の夏から1年アメリカに交換留学するため、少しでも学部授業に慣れることができたらと思い履修を続けましたが、毎回苦しい思いをしていました。

また、タンデムパートナーは英語力の向上のために非常に大きな存在でした。みな出身国はバラバラでしたが、日本文化に興味をもってくれていました。こちらが英語学習者であることをよく理解してくれていて、うまく説明できないときや英語がでてこないときには待っていてくれたので純粋に英語で会話することを楽しむことができました。授業で出された課題を見てもらうことも何度かあり、その際にはネイティブだからこそわかる表現の違いやアカデミックな書き方などを細かく教えてくれてとても勉強になりました。同じく私が彼らに日本語を教えることもあったのですが、間違っただけを訂正するときには正しく簡単な日本語にするにはどうしたらいいだろうと考えると非常に難しかったです。また、彼らのアニメや漫画の詳しい知識には驚かされ、日本人である自分の自国文化への理解をもっと深めておけばよかったと思いました。

休日にはハルから出て各地に旅行に出かけました。ロンドン、スカーバラ、エジンバラ、リバプールと毎週1泊2日で行き、イギリスを堪能することができました。電車で行きましたが、改札がなかったり電車がとまったりと驚きの連続でしたがよい経験でした。切符は高いので、レイルカードを買って三分の一割引で切符を買っていました。それぞれの街には違った雰囲気があり、どの街も観光名所それぞれではなく街全体で美しい景観を作りだしているように感じました。世界史を学んでいた身としては歴史に関わる場所や建物が多くとても楽しかったです。観光中は日常的な英会話で店員さんと話す機会が多いので、生の英語に触れられたように思います。料理も多く楽しみましたが、印象としてイギリス料理という枠組みはあまりないように感じました。世界各国の料理が集まっていて、イタリアンや中華、スペイン料理、クルド料理というのも見かけました。イギリスにはやはりパブが多く、フィッシュ&チップス

やベーグルなどパブ料理が多かったです。

五週間という間でしたが、それほど長くいたとは思えないほど充実した楽しい留学生活になりました。それは一緒に渡航したお茶大生とハル大学の **Japanese Society**、先生方のおかげです。特に **Japanese Society** には本当によくしてもらい、パーティーやボウリング、パブなど大勢で集まって自由に会話をし、同じことをして楽しむというかけがえのない時間を頂きました。短い間でしたがお世話になりました。この留学に関わってくださった全てのかたに御礼申し上げます。ありがとうございました。



ハル大学短期研修を終えて

生活科学部 人間生活学科

1年 定行 景子

～参加動機～

ハル大学研修に行くまで、私の海外経験は韓国への留学のみであり、ヨーロッパという遠い国に5週間もの長い間滞在するというのはかなり大きな挑戦であった。しかし、好きな英語をもっと話したい、英語を使って海外の友人を作りたい、あえて普段と違う環境に身を置くことで自分を試し、さらに成長したいという思いから留学を決意した。

～現地での授業～

本プログラムでは、Academic Writing や British Study の他に、Speaking を軸とした Language Communication の授業を受けた。加えて、現地の先生がお茶大生のそれぞれの専攻に合った授業を提案してくださったため、自分の興味のある授業を聴講することもできた。

授業は、お茶大生13人が2つのグループに分かれ、日本人の他にサウジアラビア人や中国人など、現地で英語を学んでいるアジア系の学生とともに学んだ。



Reading、Listening については各授業内で資料を扱い、Writing は毎週それぞれ課題が出されたため、どの英語力もバランスよく鍛えることができた。なかでも特に多く求められたのは Speaking であった。他のクラスメイトと日本人との大きな違いは、自分の意見を表現しようとする積極性と、それを伝えるための Speaking 力の高さであった。先生の投げかける質問に真っ先に答えようとする姿勢に最初は戸惑った。しかし、私も自分の考えをなるべく言葉にするよう心がけたことで、授業がますます活発、かつ楽しいものになっていった。

各授業内で出される課題の他に、最終課題として 500 Words 程度の Essay と、Japanese Culture についての Presentation を行った。特に Presentation では、先生やクラスメイトに日本の文化を知ってもらい、大変良い機会となった。また、日本、イギリスの他にサウジアラビア、中国、とそれぞれの国の文化と比較を行い、新たな違いや共通点を見つけることができ、とても興味深い経験となった。

～現地の人々との交流～

Japanese Society のメンバーと、Language Exchange Partner (Tandem Partner) との交流が主なものであった。Japanese Society の方々は、到着直後から寮や大学、ハルの街の案内をしてくれたり、毎週にわたってボーリング大会、York や Beverley など地方観光の企画をしてくれたりしたため、とても楽しい時間を過ごすことができた。



また、Tandem Partner については、日本人 1 人につき 4～5 人がランダムに割り振られた。お茶をしながら雑談をしたり、家に招待してもらって互いの国の料理をごちそうしたり、といった親密な交流ができた。また、彼らの多くは日本語を学んでいるため、日本語の課題を手伝ったり、逆に自分の英語の課題を見てもらったりすることもできた。彼らとの交流は、今後も SNS などを通して是非続けていきたい。

～本研修で得たもの～

この 5 週間の研修を通して、英語力はもちろん、様々な面で成長することができた。

まず、普段とは異なる環境に身を置いたことで、日本を、そして自分を見つめ直す機会を得ることができた。治安の良さ、食生活と健康状態の良さ、清潔さなど日本の良いところを改めて実感した。イギリスについては、何歳になっても何かを学ぼうとする現地の人々の積極的な姿勢から、特に良い刺激を受けた。自分も、学生であるないに関わらず、今後も勤勉な姿勢を保ちたい。また、私は保育を専攻しているのだが、現地の方の話から、イギリスの教育制度や保育制度についても知ることができた。制度や文化の違いにも興味を持ったので、自分の専攻の勉強もさらに頑張りたい。

そして、英語については、英語を使っているいろいろな国の人々と交流を深められることの楽しさ、文化や歴史などの幅広い知識を持つことの大切さを再確認した。今回、多くの友人を作ることができ、自信にもつながったため、これからも彼らと交流を続けつつ、英語力を高めていきたいと強く思った。

ハル大学短期研修を通して

文教育学部 人文科学科

1年 藤田 美波

参加動機

私は今まで留学に行こうとは考えておらず、春休みはサークル活動に専念しようと考えていました。しかし、友達に短期留学のパンフレットを見せてもらった時に、そういう場所に身を置いてみるのもいいかなと思い気持ちが変わりました。自分の中で納得してから決めたかったので、できるようになりたいことを3つ考えました。1つ目は英語のスキルを上げること、2つ目は異国の人々や文化に直で触れて、広い視野で物事を考えたり、受け入れたりすること。そして3つ目は、苦手なことがあると逃げてしまいがちな自分を変えることでした。全て出来るようになったかは分かりませんが、これからの努力次第ということもあるとは思いますが、今回イギリスに留学に行ったことで、得られるものがたくさんありました。

プログラム

・ ハル大学での授業

留学生の英語クラスに混ぜてもらい、授業を受けました。クラスメイトにはサウジアラビアと中国出身の方がいて、年齢もさまざまに私たちと近い年齢の子供がいる方もいました。授業内容は、speaking、reading、academic writing、British education などで、英語で英語の勉強をすることがメインでした。授業中はクラスメイトと話し合うことが多かったのですが、お互いに英語に癖があり、なかなかスムーズに会話を進めることができませんでした。違う表現を考えたり、スペルを書いたり、工夫をしながら話し合うこともしばしばありました。また、授業中にわからない単語や、事柄があった時には、先生にその場で聞くと親切に教えてくれました。授業中に活発に発言をするほど、吸収することも増えるように感じました。

・ language exchange partner とのコミュニケーション

ハル大学で日本語を学んでいる学生とパートナーになり、お互いの言語や文化を教えあうというプログラムがありました。昼ごはんを一緒に食べたり、街を案内してもらったりしながら、日本語と英語を混ぜて会話をしました。思いがけないところに疑問を持っていることも多く、日本語を教える難しさを感じました。

・ 現地小学校訪問

ハルから少し離れたところにある、小学校を訪問して、日本文化についてのプレゼンをしたり、浴衣の着付け・習字の体験をしてもらったり、一緒に給食を食べたりしました。7、8歳の子どもたちを対象にやりましたが、楽しんでもらえたようで良かったです。

現地学生との交流

滞在中には、ハル大学の Japanese Society というサークルの皆さんにお世話になりました。まずは寮の近所を案内してくれたり、最初に必要なものの買い物に付き合ってくれたりしました。Welcome party や Farewell party の企画をはじめ、週末と一緒に観光に行ったり、放課後に遊びに行ったりもしました。5 週間の間にたくさんの思い出を共有し、Society のみんなとは本当に仲良くなりました。中にはとても日本語が上手な方もいて、さまざまな場面で英語のサポートもしてくれました。



観光

ハルに滞在している間には4回の週末があり、いろいろなところへ観光に行きました。

・ Beverley

最初の週末には、ハルからバスで30分ほどのところにある Beverley という街へ行きました。小さな街でしたが、マーケットやお店の並ぶ通りなどを訪れ、聖堂では係の方に普段見ることの出来ないところへ案内してもらったりしました。

・ London

私は金曜日に授業がなかったので、3回目の週末の金曜の朝から日曜の夜まで London へ旅行に行きました。たくさん歩いて、地下鉄に乗って、数多くの観光地を巡りました。聖堂やビッグベンなどの建造物は実際に見ると本当に迫力があり、感動しました。また、街並み自体もとても素敵で、歩いているだけで楽しむことができました。

まとめ

今回の留学で、何事も自分次第ということ強く感じました。授業の参加の仕方、自習の仕方、そのひとつひとつを工夫することで、得られるものも変わってくると感じました。そして、実際に外国に行って、外国でしか体験できないこと、気づけないことにたくさん触れることが出来ました。(ちなみに日本の素晴らしさを痛感することもたくさんありました…)

ハル大学研修を振り返って

生活科学部 人間生活学科生活社会科学講座

2年 堀江 さくら

私は、勉強科目として、英語がとても苦手でした。そう言った理由から敢えて積極的に英語を話さなくてはならない環境に身を置いてみたい、という気持ちが以前から強くありました。そのため、今回この春休みの時間を使って、ハル大学の研修に参加することを決意しました。

Japanese society の仲間との出会い

ほぼ 20 時間近いフライトの後、ようやくイギリスに着き、さらに寮に到着すると、**Japanese society** というハル大学のサークルの人たちが私たちを出迎えてくれました。それから 5 週間の滞在中、ずっと彼らに様々なところで面倒を見てもらいました。彼らは皆、様々な分野で日本に興味がある人たちばかりだったため、とても積極的に私たちに話し掛けてくれ、一緒に時間を過ごす中で、たくさんの質問を投げかけられました。

特に、印象に残っている事は、日本語を学んでいる人たちに、日本語を教えた事です。日本語が母国語ではない人たちにとって、日本語のどこが難しく、どこが分からないのかを聞いた時、自分の世界は 180 度変わりました。ティヴとして日本語を話しているからこそ気付かなかった、日本語の特徴に気付かされ、また、日本語のみならず、語学を教えるということの大変さを身にしみて感じました。



ハル大学での授業

大学では、speaking, writing, reading, listening を週 20 時間学びました。クラスは 15 人ほどの少人数のクラスで、英語を母語としない、サウジアラビア人、クエート人、中国人、そして私たち日本人が集まった多国籍なクラスでした。先生が話して、ひたすら静かにメモをして、という授業風景が多い日本ですが、ハル大学でのクラスは、全く違いました。先生は、ことあるごとに私たちに質問を投げかけてきて、その質問に学生は積極的に発言していました。私たち日本人は、そのスタイルに慣れていないという事と、間違えているかもしれない、という恐怖から積極的に発言することが難しく感じましたが、自分の思っていることを間違ってもよいから伝えようとする気持ちがどれだけコミュニケーションをする上で大切なことか、という事を体感しました。また、ちょっとした休み時間などにクラスの人たちと話すだけでも、文化の違いに驚くことがあり、とても刺激的でした。英語を勉強するという目的で短期留学を選択した私にとって、ハル大学が用意してくれたこれらのプログラムは本当に充実したものでした。

異文化に触れて

平日のハル大学での授業、週末のロンドン旅行、Language partner と過ごした時間、地域の小学校での日本文化の紹介などなど、わずか5週間の滞在ではありましたが、とても密度の濃い体験をさせていただきました。異文化に触れていると、自身の国のことも見えてくる、とよく聞きますが、本当にそうだと感じました。私は、たとえ初対面の人であっても気さくに言葉を掛ける、イギリスの文化を素敵だと思いました。また、Japanese Society という一つの団体を見ていると、年代が違ってても、同じ言葉を話す英語という特徴をととても感じました。逆に言うと、日本語は、話す相手や立場というものを考えて話す言葉が変わる、そういう文化であり、言語であるのだということの特徴だということに気付かされました。今後留学を考えている方は、イギリスや英語という事にこだわる必要はないと思います。異文化に身を置く事で、今まで見えていなかったものが見えてきます。その経験こそが大事だと思いますので、ぜひ物怖じせず海外で過ごすことをおすすめします！



Hull University

生活科学部 食物栄養学科

1年 寒川 理子



動機

留学しようと思った理由は2つ。一つは、とにかく親から離れた環境に身を置きたかったこと。そして、この1年自分は何も熱中できるものが見つけられなかったので、海外に飛び出そうと思ったこと。

授業

授業は当たり前だけど、全て英語。最初は、ほとんど聞こえなくて、次に何をするのか、どこが宿題なのかさえ分からないといった具合だった。しかし、私のように **listening・speaking** が壊滅的でも、5週間も経てば案外聞こえるようになるもので、不思議なものだ。先生方は本当に親切で、同じクラスのアラブ系や中国系の人（かなり大人）も本当に親切で面白い。日本の授業とはかなり違い、自分の意見をぐいぐいと発言していくスタイル。**Discussion** が多く、常に自分の意見を要求される。普段あまり何も考えていない私としては、少し辛いものがあった。日本人はよく **shy** と言われるわけがよく分かる。たとえ分かっている、自信がないか、発言する勇気がないか、そもそも自分の意見がないかで、黙りこくってしまう。この5週間のうちで、間違ってもいい、とにかく考えて自分の答えを声に出そうという姿勢に変えることができた。クラスが私たちの半分7人と、他6人で13人と小さいこともあるが、何より、他の留学生の積極的な姿勢が大きな要因だと思う。ときに **discussion** をビデオに撮られた。自分の意見がまず無いと話にならないし、他人の発言を聞き取れないと、自分の意見を述べるだけで **discussion** にならない。非常に悔しい思いをした。イギリスの教育や法を勉強したのだが、日本について話すとき、いつも **maybe** を使ってしまった。ああ、自分は自分の国の仕組みさえ知らないのだと実感した。

聴講の授業に **Exercise & Nutrition** を取った。論文を書く上で、どういう実験をするかといった内容。先生の英語が普段の授業と同じくらいの速度で、パワポもあり、分かりやすかった。録音しておいて、帰国してから聞くと楽しい。他に **Japanese culture** を取った。話し合いをする相手の英語が非常に早くて、聞き取りに苦労した。

課外活動

本当に **Japanese Society** の人にお世話になった。中には日本語をぺらぺらに喋れる人もいて、週末や放課後には様々企画してくれた。**York**、**Beverley**、カラオケ、大人用アスレチック、水族館、**party** など盛りだくさん。もともと自分が消極的であることと、英語で話しかけたとして、相手の言っていることが聞き取れるかという不安で、かなりためらった。し

かし、分からないという顔をするか、どういうことなのか聞くと、別の言葉でゆっくり説明してくれる。何も恐れる必要などないのだ。みんな本当に親切だし、怖気付いてしまったのは、留学に来た意味がない。他の日本人が自分よりもうまく喋れるとしても、気にする必要などない。自分は自分の言葉で、伝えればいいのだ。

Tandem partner という日本語を勉強している学生 5 人とペアになる活動があった。5 週間の付き合いにはなるけれど、帰国後も連絡をとるほど仲良くなれた。日本語を教えるのは、かなり難しかった。日本語に比べたら英語は簡単な気さえしてくるので、こちらの英語の学習のモチベーションにもなった。日本語の宿題を見てあげたり、こちらの英語の発音を見てもらったり、休みの日に一緒に出かけたり、学内でお昼を食べながらお喋りをしたりと、相手により様々。いろんな人と関わることができる大きなチャンスだった。

小学校に着物と書道について授業をしに行った。非常に可愛い子たちと触れ合えて楽しかったが、子供達の英語がうまく聞き取れないことも多く、自分が不甲斐なかった。給食には驚いた。お弁当を持ってきた子のほとんどが、**potato chips** だった。

自分の殻に閉じこもることが、ほとんどなく、忙しく充実した日々であった。

イギリスでの生活

寮の環境は残念ながらあまり良くなかった。電気やイスがない、**wifi** が飛ばないなど。こちらの友達に助けてもらうか、寮の管理人に話して解決できた。しかし、言っても解決しないこともあり、私の部屋は暖房が最後までつかなくて寒かった。同じ **flatmate** は毎日ぐらゐの頻度で **party** を開き、大音量で音楽が流れるので、静かな環境ではなかった。悪い人ではないので、友達はかなり仲良くしていたし、ここにもまた交流がある。

London に旅行に行き、見るものすべてに圧倒された。道に迷ったら人に聞いたり、人に聞かれたり。迷子になり、歩行者何人にも聞いたが分からないと言われてしまった時、ホテルの人に聞くと地図を印刷してくれて、かなり有難かった。方向音痴の私は、日本で事前に **google** のイギリスの地図をダウンロードしておいた。現在地と向いている方向だけでもわかるから便利。ネットの繋がらない観光は、なかなか面白かった。

全体を通じて

今回初めての海外だったので、文化が違うのはこういうことかと感動した。目が会うと微笑んでくれる、レディーファースト、片付けという概念が無い、喫煙率が非常に高い、**obesity** が深刻な問題であることなど。幸運なことに授業では **obesity** について扱ったので、自分の分野の問題について深く考えることができた。日本にも **Mac** などファストフード店はあるのに、どうして肥満じゃないのかと聞かれ、非常に困った。イギリスの給食を体験すると、やはり食の教育に原因があるのだろうか。そもそも食への興味が薄いというのも、原因だと思う。日本にいと実感できない、世界の問題を知り、視野が広がった。今後生きる大きな出会いだったと思う。密度が濃いためすごく長いようで、あっという間の 5 週間だった。ハル大学の良さは、ハルでしか会えない素晴らしい友達に出会えること。英語が喋れずともできる会話はたくさんあるけれど、英語でしか楽しめない会話もある。これから英語の勉強に励むとともに、今回の留学で関わってくれた全ての人に感謝したい。



 **MONASH** College

参加者 6 名

輝いたメルボルンタイム

人間文化創成科学研究科 教育科学コース

1年 宋 佩

メルボルンで 5 週間留学生生活を体験しました。毎晩 11 時ぐらいに寝て、朝 7 時ぐらいに起きて、7 時 40 分ぐらいに家から出て、8:30 に学校に着く健康な日々を過ごしてきました。2、3 月のメルボルンは少し暑くて、何日も 40 度を超えました。しかし、ビーチはすごくきれいで、ホストファミリーが週末に何回も連れて行ってくれました。海で泳いだ快きは一生忘れられないです。それに、昼間が長くて夜 9 時までには明るいので、午後の授業が終わったら、またシティーとかビーチに遊びに行けます。よく一日中いろんなことができると感じました。

授業はグループディスカッションが多くて、様々な意見と話が聞けます。先生たちもすごく博学で面白い人たちです。授業時間は毎日 4 時間から 5 時間程度で、あまり疲れなかったです。

ホストファミリーはお母さんと小学生の女の子と中学生の男の子の三人家族です。放課後よく一緒にテニスと水泳をしました。オーストラリアの子どもは明るくて、毎晩寝る前ハグして、**good night** と言ってくれました。朝ご飯はよくトーストにして、昼ごはんはお弁当を学校で食べますが、私はほとんどサンドイッチでした。ホストファミリーによって、お弁当は違います。晩御飯は家で食べます。パスタとかカレーとかポテトなど美味しいと思いました。ホストファミリーはやさしくて、**Wi-Fi** も無料で使えます。

お休みの日はクラスの友達と一緒に色々なところに行きました。**The great ocean road** に行った時、本物のコアラもみました。フィールドトリップは動物園に行きました。あの時様々なオーストラリア特有の動物をみました。三連休の時、お茶大の四人とシドニーまで行きました。オペラハウスをみた瞬間、感動しました。子どもの時からの夢を叶えたような感じでした。あとメルボルンで博物館、戦争記念館、マーケット、教会などに行ってみました。楽しくて勉強になりました。



モナシュ大学研修

理学部 生物学科

1年 福田 彩華

《授業内容》

私はメルボルンにあるモナシュ大学の短期留学プログラムに参加しました。全部で5週間の授業プログラムだったのですが、最初にお茶大生と阪大生との合同授業が一週間ありました。ここでは次の週から始まる導入として英語で会話や、意見をグループ内でそれぞれ話し合うこと、またメルボルンでの生活で使える基礎知識を学ぶ授業を受けました。先に阪大生の友達も作れましたし、いくつかの他大学との4週間の授業が始まる前に一週間先に行くことができたのはよかったです。

次の4週間は、さらに名古屋、一橋、九州、東工、学芸、埼玉大が加わり本格的に授業が始まりました。毎週勉強するテーマがあり、週末にはTaskが出ます。それは環境のことであったり、多文化のことであったり、様々で、最終週にはプレゼンも行いました。フィールドトリップもいくつかの場所から選ぶことができ、私はヒールズビルサンクチュアリというオーストラリアの動物のみがいる動物園に行きました。元からオーストラリアの動物に触れ合えることを楽しみにしていたのですが、メルボルンには大きな動物園が三つありますし、授業でもオーストラリアの動物について学ぶ機会があったのでたくさん知ることができました。

またモナシュ大学は、本当に大きな大学でキャンパスもとても広いです。お昼は基本的に家からお弁当をもって行っていました。13時前に授業が終わる場合が多かったですが、たまに午後までありました。授業中は全て英語で、たくさん会話をする、surveyを行い発表する、という機会が多く、私はまだ普段日本の大学で学ぶ機会がなかなかありませんでしたので、ためになりました。



《生活面について》

メルボルンは、オーストラリアの第二の都市といわれ、人も多すぎずシティへの交通機関

も発達しており、とても過ごしやすかったです。大学へ通うにはバスを主に使い、他の場所に行くには電車やトラム(路面電車)を使いました。

今回はホームステイだったのですが、私にとって初めてのホームステイでした。私のホストファミリーには他にも留学生の女の子が二人いて、夕飯の前後にお話もできて仲良くなることができましたし、とても楽しい大家族でした。積極的に会話していこうと臨んでいったはずなのに、最初の一週間は自分の言いたいこと、聞きたいことを伝えるのがなかなかうまくいかず、バスを間違えたり道に迷ったりして(Google マップに救われました笑)、落ち込みましたが異国の未知の土地では誰でも最初はこのくらい、ここから徐々にと思ってだんだん慣れてきました。お昼で授業が終わった日はクラスメイトとシティや観光名所を訪れたり、バーベキューをしたり、休日には行きたい所へホストファミリーが連れていってくれたりもしました。

5週間ではありますが、授業やホームステイで英会話力はつきましたし、何よりも楽しく、このモナシュ大学のプログラムは参加してとてもよかったです。オススメです。

そもそも私が留学に参加してみようと思ったきっかけは、元々大学生になったら海外留学に行きたいというのもあったのですが、視野を広げたい、自分のこの先の進路や道を考える糧にしたいという考えのもとです。実際、海外の大学生はたくさん勉強していることを現地で身をもって知り、自分ももっと勉強せねばと感じました。このプログラムに参加して、オーストラリアに、メルボルンに行くことができ本当によかったです。

モナシュ大学春季短期留学を終えて

文教育学部 言語文化学科

1年 脛永 舞花

授業内容

1クラス20人ほどの少人数で英語でのコミュニケーション能力を高めるプログラムでした。参加学生は大阪大、九州大、名古屋大、一橋大、東工大、埼玉大、学芸大とお茶大の学部生または大学院生でした。クラスメートはもちろん全員日本人で、初めは日本語を使ってしまわないか不安でしたが、クラス全員で積極的に英語を使うように心がけていました。授業では、グループもしくは個人でのプレゼンテーション、他クラスとのディスカッションなどを1週間かけて準備し、金曜日に **Assessment task** として提出していました。他にも、前日の出来事や週末の予定を自由に話すフリートークの時間や授業内容をゲーム形式で確認する時間などもあり、楽しく英語を学ぶことができました。



課外活動

・ ボランティア活動

conservation volunteers という団体のボランティア活動に大阪大の学生とともに参加しました。この団体はオーストラリアに生息する動植物の保護活動を行っていて、私たちは外来種の植物の除去とオーストラリア由来の植物の水やりをしました。大きな自然公園で行い、そこではカンガルーを見ることもできました。

・ フィールドトリップ

オーストラリアの文化や自然に触れることができる5つのスポットから、事前に希望した場所へフィールドトリップとして訪れました。私は **Werribee Mansion** と **Werribee Zoo** に行きました。**Werribee Mansion** は19世紀ビクトリア時代に建てられたイタリア様式の豪邸で、その建物の凝った作りに圧倒されました。**Werribee Zoo** はアフリカの動物を近くで見ることのできるサファリパーク型の動物園で、バスに乗り動物のいる檻の中に入ることができました。日本の動物園では見ることができない動物がたくさんいました。



- ・ 小学校訪問

Caufield という大学のキャンパスから少し離れた場所にある小学校へクラスメートと訪れました。その小学校ではバイリンガル教育を進めており、英語と日本語で授業を行っていました。小学校には日本人の子やハーフの子だけでなく、オーストラリアや他の国で生まれた子も一緒に勉強していました。私が驚いたのは、子供達の日本語理解力です。日本の小学生の英語力と比べ、その小学生は日本語しか使用しない先生の言ったことを理解し、日本の文化、書道や折り紙なども楽しんでいました。休み時間になると、日本の子供たちと同じように校庭の遊具で遊んだり、鬼ごっこをしたりと無邪気に遊んでいました。オーストラリアという多文化主義社会の教育現場を実際に見学することができたのはとても良い経験となりました。

- ・ アボリジニーの文化体験

オーストラリアの先住民であるアボリジニーの文化を体験することができる機会がありました。Didgeridoo という民俗楽曲を聴いたり、ボディーペインティングをしたり、ブーメランを投げたりと、このプログラムならではの貴重な体験をすることができました。

- ・ シドニーへの2泊3日旅行

幸運にも一度3連休があったため、隣のニューサウスウェルズ州にあるシドニーへお茶大の友人と旅行に出かけました。オーストラリア最大の都市ということもあり、メルボルンよりも人が多いなと感じました。また、南極からの風がないからか、メルボルンよりも比較的温暖でした。

- ・ 日本語クラブ

モナシュ大学の日本語を学んでいる学生によって運営されている日本語クラブでは多くの現地学生と関わることができました。日本の文化や言葉を好きで学ぶ人が多くいることに喜びを感じました。日本語クラブの友達とは帰国後もチャットやテレビ電話で連絡を取り合っています。



モナシュ研修で得たこと

文教育学部 人間社会科学科
1年 上坂 琳



まず、授業に関しては、基本毎日英語を用いたアクティビティが行われましたが、各週のテーマが異なり、オーストラリアを様々な観点から知ることができ、またエッセイ、プレゼン、ディスカッション、ディベートといったようにタイプの異なった出力の仕方を体験することができたため、風土について学ぶと同時に英

語のスキルを上げることも十分にできたと思います。実は、オーストラリアについての知識は世界史で習った表面的なものしか持っていなかったため、現在抱える環境問題や動物保護問題について学んで、日本との共通点や相違点を見つけて考えるととてもおもしろく感じました。また、クラスに関しては、日本のあちこちの大学からの学生を混ぜて構成されていたので、新しい友達ができたり、その地方の話が聞けたりして楽しむことができました。時間のある時には、クラス単位で外出することもありました。

今回のプログラムでは、ホームステイをしましたが、ホストファミリーと暮らすことで学べたことも多くありました。一番大きかったのは、文化・考え方の違いに関することでした。特に宗教では、ホストファミリーはイスラム教徒、ハウスメイトはキリスト教徒でした。信教していない自分にとっては、豚肉を食べない、礼拝に行くなどの宗教による決まりごとを日常生活で目の当たりにするのは初めてのことで、とても興味深く思いました。また、料理は日本のものとは全く違うものでした。スリランカ人の家族とインドネシア人のハウスメイトから、普段どのような食材を使って、どのような調理の仕方をしているのかなどを多く学ぶことができました。食品産業関連の話は何回かしましたが、そのたびに日本がいかに果物・肉などを外国に依存して成り立っているのかを痛感しました。考え方の違いとしては、勉学、就職、結婚に関わるが多かったように思います。まだまだ学歴社会と言われていた日本とは対照的に、オーストラリアでは職種に関わらずに平等に扱うのがすごく当たり前のことだということを教えられ、とても良いことだし日本にも時間をかけてその風潮が広まるといいなと考えました。

次に、観光地についてです。休みや午後を使ってシティを始め、他の多くの観光名所を訪

れることができました。シティの中で目を引いたのは、フリンダースストリート駅に見られるような、精密な西洋風の建物の仕様でした。図書館は特にギリシャ風で、建築に詳しくない自分にも印象に残りました。また、授業で習ったようなオーストラリアの歴史を知ることができる、移民博物館なども見られました。観光地で多かったのはグレートオーシャンロードに見られるような海・浜辺でしたが、そのどれを日本と比べても、海水の透明度が高く、岩の形状が美しく、感動しました。途中にあった三連休を使ってシドニーにも行きましたが、メルボルンとは違い、居住用というよりは高層ビルという印象を受け、同じ国なのにおもしろいと感じました。



この留学で一番印象が強かったのが、地元の学生との交流でした。大学内にある日本語クラブの活動や文化交流で訪問した日本語クラスでの活動を通して多くの学生と知り合うことができました。自分としては、日本語は世界的にマイノリティな言語であるというイメージでしたが、多くの人が日本の文化や日本語に興味関心を持ち、自主的に学んでいるのを見てとても驚きましたし、同時に嬉しく思いました。そして、日本語にとどまらず、大学生になってから数カ国語を学んでいる人たちと関わる中で、共通語である英語にすら、あまり意欲的に取り組んでこなかった自分が恥ずかしく思え、今後の語学習得へのトリガーとなりました。

最後に、オーストラリア一国への研修でしたが、様々な文化圏の人々と交流し、英語で意見を交わし合えたことを本当に幸運だと感じています。もう一度オーストラリアを訪れる際には、今回作った友人と再会してまた意見交換できたらいいと思います。

モナシュ大学の短期研修を終えて

文教育学部 言語文化

1年 的場 素子



授業内容

クラスは日本の学生17人と先生一人でした。オーストラリアの環境、multiculture、globalizationなどについて学びながらクラスメイトとディスカッションしました。授業では自発性が求められます。積極的に授業に参加し発言すればするほど充実するものになりました。

課外活動

- ・ fieldtrip

Werribee Mansion と Zoo Warrok に行きました。

動物園ではオーストラリアで絶滅の危機にさらされている動物 Bandicoot に実際に触れ合いました。これは一週目のサプリメントクラスで名前だけ知った動物だったので興味深かったです。サファリーパークを体験しました。初めてで、普段みられない動物を近くに見られて嬉しかったです。この動物園に行く前にメルボルン動物園に行っており、カンガルーに餌をやったり、触ったりできました。オーストラリアの動物園は日本と比べ柵が少なく、開放的で自分も野生の世界に入ったようで新鮮な感覚でした。

- ・ グレートオーシャンロード

2週目の終わりにお茶大生6人とグレートオーシャンロードに行きました。みんなでサイトを探し、予約をしました。電話したり、ホストファミリーと交渉したりなどいろいろ不安がありましたが、無事に行くことができました。ヘリコプターに乗り上空から綺麗な海、12使徒、海岸線を見たり、ロックアードゴージにいき、ビーチに入ったりなど、普段見られない絶景を存分に楽しむことができました。野生のコアラをみることができました。コアラは意外と目が小さく、思ったよりかわいくなくて面白かったです。

- ・ ホストファミリーと

オーストラリアは移民が多い国ときいており、どんな人か自分が英語を聞き取れるか話すことができるか緊張でいっぱいでした。今でもファミリーと会う前の緊張を覚えています。ファミリーは60代の夫婦でとても親切で親しみやすかったです。チリ出身の方で自分が今まできたことのある英語と違うため、何回も聞き返しましたが、一週間で慣れることができました。また、ファミリーもチリから30年前に移住したので、私が日本から英語を勉強しにきており、不安でいっぱいであるこ

とを良く理解してくれていました。私が学校であったこと、休日したことなどちゃんと聞いてくれたのが嬉しかったです。何より、私を家族の一員として扱ってくれたのが嬉しかったです。

Task

毎週宿題が課されました。私はこの宿題を通してプレゼンテーション力が磨かれたと思います。2週目は現地の学生30人に質問し、その結果をまとめグループのメンバーと発表するというものでした。知らない人に一人で質問するのは勇気のいることでしたが、みんな優しく、ちがう話題でコミュニケーションもとれ嬉しかったです。このプレゼン発表は、グループで行う為緊張は小さかったですが、5週目のプレゼンは一人で緊張しました。本番に弱く、人前で話すことに慣れていないと気付きました。ボディランゲージ、スライドの作り方などのアドバイスをいただきました。絵を多く、文字は少なくし、聞き手が自分の話に興味をむくようにすること、聞き手とのコミュニケーション、原稿は文ではなく、キーワードだけでかくことで原稿に頼らず自分の口でいえることなど。今回のプレゼンで反省点があり、悔しい思いをしたので、次に行うときは事前に練習をきちんとし、アドバイスを活かし、リベンジしたいと思いました。

最後に

この留学での一番の目的は自分の英語力を上達させることでした。最初は失敗することが嫌で不安でしたが、英語を使って現地の学生や人と盛り上がったり、知らない人に助けてもらったりするうちに、みんなそれぞれ違う母国語をもっているのに“英語”を使うだけでコミュニケーションをとれるのが面白く楽しく感じるようになりました。また、一緒にホームステイした18歳の中国人留学生の存在が英語への「やる気スイッチ」を押してくれた大きな要因でした。彼女はとても英語を流暢に話していますが、1年前は英語を話すのが得意ではなかったようです。6ヶ月留学するうちにできるようになったそうです。

はじめは自分の言っていることが一回で伝わらなかつたりしたため、発音をよくして繰り返したり、違う表現で言ったり、相手が聞き返してくれたりして手間がかかりましたが、そうしていくうちにいろんな表現が学べ、自分の英語力も改善できたと思います。英語は話せば話すほど上達するので、この留学で身につけた力を保ち向上するためにも学校の授業やサークルで使いつづけたいです。

モナシュ大学 春季短期研修を終えて

文教育学部 人文科学科

1年 高田 実穂

春季の短期語学研修プログラムとして、オーストラリアのモナシュ大学に5週間滞在しました。当初の目的は①英語力、特にスピーキング力の向上、そして②多文化社会に触れることでしたが、振り返ってみるとそれ以上にたくさんのものを得ることができました。今回は、モナシュ大学での授業、ホームステイ、そしてメルボルンでの生活という3点についてまとめようと思います。

写真1 クラスメート



モナシュ大学での授業は、英語力の向上を目的として、プレゼンテーションやディスカッション、ディベートなど、インタラクティブな学習を中心としたカリキュラムが組まれました。オーストラリアの歴史やマルチカルチャリズム、そして昨今のグローバル化や地球環境問題などをテーマに扱い、それぞれのメリットやデメリット、考えられる影響などを俯瞰的に見つめていきました。特にオーストラリアの歴史を通して、先住民アボリジニーとの抗争の歴史、そして今後人々は彼らとどのような姿勢で向き合おうとしているのか、「多民族国家」オーストラリアが今に至るまでの道のりを学ぶことができ、非常に興味深かったです。また授業は日本各地の国立大学から集まった学生たちと同じクラスで行われたので、彼らとの仲はとても深まりました。全国各地に友人ができ、交流の輪が広がったという意味でもこのプログラムに参加してよかったと思います。またプログラムの一環としてフィールドトリップに出かけたり、大学内でも様々なイベントが行われました。特に留学生支援チームの方々主催で開かれたBBQでは、カンガルー肉のハンバーガーを振舞われたり、アボリジニーのパフォーマーを呼んで彼らの文化を体験したりしました。どれもオーストラリアでしか経験できないことだったので、貴重な機会を設けてくださったモナシュ大学の方々の配慮に感動しました。そのほか、現地学生が受ける日本語クラスに参加したり、モナシュ大学の日本クラブとの交流の機会もあったので、意欲さえあればたくさん現地の友達ができます。

次に、ホームステイです。5週間という長い海外生活のなかで、ホームステイは非常に大きなポイントの一つでした。幸い私のホストファミリーはとても親切で、毎日コミュニケーションをとる時間やきっかけを与えてくれました。インド系のホストファミリーだったので、料理をしているときにインド料理のスパイスについて色々質問してみたり、サリーを着

せてもらったり、とにかく相手に興味をもって話しかけてみることを心がけました。日本人は気を遣って言いたいことを言わない傾向がありますが、海外ではむしろ自分の意思をはっきり伝えることが重要視されます。ですから、何かわからないこと、不安なこと、気がかりなことがあれば、必ずコミュニケーションを図って納得のいくまで尋ねるようにしていました。こうしたやりとりを通じて、たとえ英語が流暢でなくても相手に伝えようとする意思さえあれば必ず相手もわかってくれる、異なるバックグラウンドをもった人同士でも深く理解し合えるということ、身をもって感じました。5週間という時間を家族同様に過ごしたホストファミリーは、私にとってかけがえのない存在です。



写真2 サリー体験

最後に、メルボルンでの生活についてです。メルボルンは非常に過ごしやすく、多文化な街です。電車やバス、大学やシティなど、一歩外に出れば色々な肌の人々が共に生活しています。食べ物は非常に美味しく、様々な国の料理を扱ったレストランが立ち並んでいます。気候は基本的に暖かいですが変わりやすく、スコールのような豪雨が降ったかと思えば、数分で日が射し始めることもありました。そして、メルボルンの人々は本当に穏やかで、親切な人が多いです。最初の1週間はどこへ行くにも不安を感じていましたが、尋ねれば必ず教えてくれますし、現地の方から心配して声をかけられるときもありました。日没は夜8時頃と遅いですが、シティの店の多くは5時や6時頃日本よりも早く閉まってしまいます。日本のように残業がない分、早く帰宅して家族や友人との時間を楽しむ、そういった生活の余裕が感じられる素敵な街でした。

今回このプログラムに参加して、自分自身がよりオープンな性格に変わることができました。それは、メルボルンで「個」を大切にする気風、そして日々を楽しむ人々の様子を実際に目で見て肌で感じることができたからです。また異なるバックグラウンドをもつ人々と相互に理解しあうために自分からコミュニケーションを図ったことで、失敗を恐れずに立ち向かっていく大切さを実感しました。この5週間で、そうした海外で生きるバイタリティは身についたのではないかと思います。そして、ますます海外で勉強したいという気持ちが強くなりました。今後も英語力を高める努力をしながら、英語が楽しいという気持ちを忘れずに、自分の目標に向けて邁進していきたいと思います。改めて、今回のプログラムに関わってくださった皆様に深く感謝申し上げます。



UNSW
THE UNIVERSITY OF NEW SOUTH WALES

参加者 10 名

UNSW 語学研修を終えて

生活科学部 食物栄養学科

1年 渡辺 沙恵



語学学校

オーストラリア滞在のはじめの4週間は UNSW の附属の語学学校で英語を学びました。ここでは、文法、リスニング、ライティング、発音などを学びましたが、日本の教育のようにただ先生の話聞くのではなく、ディスカッ

ションがメインであったので、英語を口に出すことに慣れることができました。日本の教育とは異なり、自分の意見を言うことを要求される教育に少し戸惑いましたが、自分が考えていることをうまく伝えることの大切さや難しさも学ぶことができました。また、私のクラスには、日本人も多くいましたが、中国人、タイ人、オマーン人、コロンビア人など様々な国籍の人がおり、その人たちの発言力に刺激を受け、私も積極的に話していかなければいけないと思うことができました。

インターンシップ

後半の2週間はインターンシップをさせていただき、私は小学校のキャンティーンとして働きました。キャンティーンとは、保護者がボランティアで小学生の昼食を作ったり、軽食やお菓子を売ったりする人のことです。はじめの週は作業をこなすので精一杯で必要最低限の会話しかできませんでしたが、外国で働くという貴重な経験をさせてもらっているのだからと思い、次の週からは自分から保護者の方々に話しかけるように努力しました。私は食物栄養学科で、特に健康と食の関わりについて興味があるので、そのことについてオーストラリアの子どもをもつ保護者の方はどう考えているのか気になり質問したり、なぜこの商品が子どもに人気なのかを聞いたり、考えたりできたことはとてもいい経験になりました。また、英語での接客の仕方は全く知りませんでしたが、保護者の方の子どもたちとの接し方を観察して身につけていくことができ、やはり、サービスをする上で、笑顔と気遣いが大切で万国共通なんだなと実感しました。

ホームステイ

私のホストファミリーは、フランスとインドをバックグラウンドに持つオーストラリア人のマザー、フランス人のファザー、16歳と6歳のホストブラザー、8歳のホストシスター

一の5人家族でした。子どもたちは会ってすぐになついてくれ、一緒にゲームをしたり、遊んだりしました。マザーやファザーに対しては、はじめ何を話せばいいのかわからず、話しかけてくれたことに返事することしかできていませんでした。しかし、たくさん話しかけてくれたおかげで、私ももっといっぱい話したいと思うようになり、その日の出来事、日本とオーストラリアの違いなどについて話したり、マザーは料理好きで、美容や健康に気を付けている方だったので、それらについてたくさんのお話を教えてくれました。

マザーは、はじめから私にたくさん話しかけてくれていましたが、私が自分から話しかけたり、相手が言ったことに対して単文ではなく、文章や質問で返そうと決めたりしてから各段にファミリーとの会話が増えたように思います。当たり前ですが、コミュニケーションはどちらか一方だけでは成り立たず、双方が相手の話を聞いて話を続けることが必要であると感じ、私も日本語でも英語でもそうなれるように頑張ろうと思いました。

子どものしつけ方、夫婦での家事の分担、人にうまく頼ることで仕事と家庭を両立しているマザーを間近で見ることができ、私もマザーのような人になりたいと思い、結婚後の自分の在り方を考えさせられる機会にもなりました。とても素敵な家族に囲まれて生活できたことをとても幸せに思います。

感じたこと



私は積極的に行動するという目標をたててこのプログラムに参加しました。英語で話すという最も大切なことに少し消極的になってしまった部分はありましたが、今振り返ると積極的に行動したからこそできたこと、できた友達、知れたことがたくさんあります。失敗することを恐れて何もしないのではなく、目標に向かって失敗しながら積極的に行動し、一つずつできるようになっていけるようにしたいです。

ニューサウスウェルズ大学の研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1年 的場 直子



<プログラムの内容>

私の研修は4週間、UNSWで一般英語を学んだ後、2週間のインターンシップ活動を行いました。英語の授業は私が想像していた授業よりも異なる部分が多かったです。まず、クラス分けテストが実施されました。クラスには中国人が多く、その次に日本人が多かったです。他にもスペイン人、韓国人、オマール人など様々な国籍を持った人たちもいました。

また、年齢も異なり、私よりも年上の方がたくさんいて驚きました。英語の授業ではスピーキング以外は簡単でした。授業はスピーキングメインでした。週末何したかというコミュニケーションから始まりました。自分の意見を発表したり、友達が言った意見を他の人に伝えるということもしました。私は英会話になると、相手の言っていることを分からないまま、相槌をうって理解しているふりをしてしまうので、この授業ではその癖をなおそうと頑張りました。しかし、クラスメイトが喋る英語は訛りがあって、聞き取ることに苦労しました。文法は中学生レベルでした。しかし、日本人以外のクラスメイトは難しそうに解いてました。国によって英語教育の方法が違うのかと考えました。読解は文章が短く、IELTSやTOEFLを受けている方々にとっては簡単に思えるものでした。

<インターンシップ活動>

私は、キャプテンクックというオーストラリアで大手のクルーザー会社で2週間働きました。とても貴重な体験でした。働く前は自分がクルーザーで働くということを想像できませんでした。職場で失敗したらどうしようと不安でいっぱいでした。働き始めた頃は何をしたらよいか分からず、マネージャーに質問ばかりしてました。一週間経過すると、仕事内容も理解し慣れていきました。仕事内容は皿やグラスのポリッシュ、お客様がお済みになったお皿やグラスの片付け、ドリンクのオーダーをとる、お客様をお席に案内するなどでした。特にオーダーをとることは、お客様と話す必要があったのでとても緊張しました。オーストラリアは仕事中に音楽を聴いたり、楽しくお喋りをしながらやっていて、仕事に効率性を求めることを重視していたことに気付きました。日本と異なる点はありましたがホスピタリティは同じだと分かりました。



<研修を通して学んだこと>

異文化を受け入れることは大切だと分かりました。オーストラリアは日本と違うところが多かったです。食べ物や価値観の違い、お風呂がないこと以外にも時間を気にしない所、バスがダイヤ通りにこないこと、お店は開店時間が早くて、閉店時間が早いことなどたくさんありました。始めは日本と違う点に戸惑う部分もありましたが、次第にオーストラリアの生活に馴染むことができました。私はNSAという日本のことが好きなメンバーが集まっているサークルに入って国際交流を行いました。私以上に日本のことを知っていました。特にアニメや音楽といったサブカルチャーに興味がある人たちが多かったです。彼らはとても日本の文化や社会を褒めていました。だから私は日本人であることを誇りに思いました。私はもっと日本について知る必要があると思いました。

UNSW 短期語学研修を通して

文教育学部 言語文化学科グローバル文化学環

3年 渡邊 愛弓

◇プログラム参加を決めた理由

もともと英語が好きだったが、高校卒業以来、まともに勉強してこなかったこともあり、特にネイティブと英語を話すことに少なからず抵抗がありました。シンプルに英語力向上と、英語学習のための動機付けのために漠然と参加を決めた次第です。またインターンシップも含まれた独特のプログラムであり、滞在期間も一番長かったことに魅力を感じました。

◇UNSW での授業

初日のプレイスメントテストに基づいて、クラス編成が行われました。予想以上に日本人留学生が多く、私のクラスには他の国からの留学生はわずか2人でした。しかし、長期留学中の日本人2人が英語を流暢に話すことに触発され、日本人のクラスメートとも学校では英語で話すようにしていました。授業は平日 9:00～13:30 に行われ、文法・会話・英作文といった基本的な科目に加えて、興味のあるニュースをピックアップして紹介するメディアスタディーズ、アボリジニーの歴史や固有の動物について学ぶオーストラリアンスタディーズ、英語でのプレゼンといった独自の科目がありました。もちろん授業はすべて英語ですが、特に理解できなくて困ったことはありませんでした。ただ、日本の授業スタイルとは全く異なり、まさに生徒主体の授業だったことが印象的です。というのも、先生が質問をしても指名はせず、生徒は手も上げずに積極的に答えなければならないのです。最初は、自由に発言することに抵抗がありましたが、数日過ぎたあたりからどんどん答えられるようになりました。常に考え、積極的に発言する癖がついたように思えます。

◇キャプテンクッククルーズでのインターンシップ

最後の2週間は、キャプテンクッククルーズというクルーズ船でインターンシップをしました。初日の待ち合わせに責任者の方がいらっしやらないというトラブルから始まり、仕事に関する説明はいっさいなしに「さあ、働いてください。」という状況で、最初はかなり困惑しました。分からないことがあったらすぐに聞く、教えられたことは一回で覚える、指示を受ける前に自分から仕事を探す、といったように自分なりに反省とトライを毎日繰り返して、試行錯誤していました。そのおかげで、マネージャーに褒められたときや、お客様に感謝されたときは、やりがいと嬉しさを感じることができました。

◇シドニーでの生活

6週間の滞在はホームステイでした。初のホームステイで不安もありましたが、帰るときには大泣きするくらいホストファミリーと仲良くなりました。ギネス更新のためのイベ

ントや、ゲイパレード、イースターなど、現地の文化を体験する機会がとても多く、充実した日々を過ごせました。部屋に閉じこもらず、ホストマザーとたくさん話すようにしていましたが、話が膨らんで、日本やオーストラリアの社会問題や、教育について語ることもしばしばあり、貴重な時間だったと思います。

◇留学を通して

急激に英語力が伸びたわけではありませんが、少なくとも英語を話すことに抵抗はなくなりました。期待以上に得るものが多く、もっと早く行けばよかったと思うほどです。多文化・多人種が共生する環境で生活できたことは、今後将来について考えるうえで、大切な一要素となると思います。



UNSW 研修を通じて学んだこと

文教育学部 言語文化学科

1年 坂東 恵

研修参加の動機：私の将来の夢は、高等学校の英語教員になることです。この研修は、6週間という春季短期研修の中では1番長期間、現地でじっくりと英語力を養成出来る点と、インターンシップで、地元学校の日本語アシスタントとして働くことが出来る点が魅力的で参加を決意しました。研修を通して本当に多くのことを学びました。

語学研修：UNSW の Institute of Language では、4週間の語学研修を行いました。週ごとにテーマが変わるので様々なジャンルの単語やフレーズの学習ができました。一方的なレクチャーではなく、自分で文を考えて書く、ペアやグループで作った即興の劇をクラスメイトの前で発表するなど、英語をアウトプットする機会が多くあったのは良かったです。これまで受けてきた日本での英語の授業は主に、英語を日本語に直すという形で解釈をしてきましたが、ここでは当たり前ですが、授業そのものが英語で行われるので、難しい英語を簡単な英語に直して説明をしたり、それを理解したりする力の必要性を感じました。英語を英語で学ぶということが自分の力になったと思います。

ホームステイ：ホームステイでは、語学学校やインターンシップと同じくらい多くのことを学びました。私のホストファミリーはマザーと13歳の娘の2人でしたが、頻繁に他の家族や友人を家に招いていたので、実際にはより多くの人と関わることができました。一緒に生活をしたことは、現地の人々の習慣や考え方に触れることができたとても貴重な体験となりました。実は研修の半ば頃に、ホストマザーの兄弟が亡くなってしまうという、とても悲しい出来事があり、その時は、ファミリーとどんな風に話をすればいいのか分からなくなってしまいました。なるべく積極的に話しかけて英語学習をしたいと思いと、そっと寄り添いファミリーを気遣いたい思いとの間に葛藤が生じました。悩んだ末に、メールで研修担当の先生に相談をしたところ、「言葉を交わすだけがコミュニケーションではない」というアドバイスをいただきました。確かに、英語を学習しに来たので、なるべく会話をしなくてはと焦ってしまっていたのですが、コミュニケーションは自分の気持ちをただ押し付けるだけではなく、相手の気持ちを知った上で、どういう風に関わればいいのかを考え、それを実行することも大切なのだと実感しました。その後、少しずつまた元のように接することができるようになり、娘の誕生日に家族全員を呼んで **Happy Birthday** の歌をみんなで歌ってお祝いをしたことが一番楽しかった思い出です。短い期間ではありましたが、ホストファミリーとは嬉しいことも悲しいことも共有することができたのだと思います。コミュニケーションに対する考え方を今まで以上に深めることができたのだと思います。



シドニーでの生活：人と人の距離が近いというのがシドニーで生活をした印象です。日本とは異なることも多く、戸惑うこともありましたが、決して生活が不便と感ずることがなかったのは、このことが影響しているのだと思います。バスの乗車と降車には慣れるまでとて

も苦勞しました。見知らぬ地ということもありますが、日本のように次はどのバス停なのかを伝えるアナウンスが車内に流れることがないので、自分で気をつけていなくてはならなかったからです。そこで、降りる場所を間違えないようにするためにドライバーに聞いたりしました。ほとんどの場合、聞けば丁寧に答えてもらえました。また、どこのお店に行っても店員さんはフレンドリーで、気さくに話をしてくれました。このように、会話をするということが基本となって、互いを理解し合い、様々なバックグラウンドを持つ人たちが共に暮らすオーストラリアの多文化社会を支えているような気がしました。

インターンシップ：この研修に参加しようと思った大きな理由のひとつであった、現地でのインターンシップでは、2週間、Ravenswood School for Girlsにお邪魔し、日本語教員のShoko先生のお手伝いをさせていただきました。将来、英語の教員になることを目標にしている私にとって、日本語アシスタントとして現地の学校の様子を肌で感じる事ができたことは、教育や言語学習を日本とは別の角度から見て学ぶことにも繋がりました。研修期間中には、プレゼンテーションを生徒の前でする機会を何度かいただき、折り紙や、本の基礎知識のクイズ、女子校ということ考慮した上での日本文化の発表などをしました。全て英語で説明するというのも、もちろん難しかったのですが、それ以上に、生徒たちの反応に柔軟に対応するという事に苦勞しました。その点、Shoko先生は非常に素晴らしいお手本でした。先生の授業は常に生徒と会話をするように進行していくようなスタイルで、生徒を飽きさせない授業作りの工夫を学びました。生徒が日本語をただ理解するだけでなく、それが使える段階になるまで丁寧に指導されている姿が印象的でした。またLanguagesの先生のほとんどは、母語を含めて3ヶ国語以上を流暢に話せるということに驚かされました。先生がまず生徒にとっての良い手本となり、生徒の言語学習へのモチベーションを高めているのだと教わりました。インターンを通じて自分の目標をより一層明確にできたと同時に、今の自分に足りない部分も新たに増えてきました。この経験を生かして、夢を叶えるために、さらに努力を続けていこうと思います。



最後に：この研修では、英語が上手く聞き取れなかったり通じなかったり、コミュニケーションが上手く出来なかったり、自分の未熟さに嫌になってしまうこともたくさん経験しました。けれど、シドニーで生活して、その気持ちは、後ろ向きな姿勢から来てしまうのだと気づきました。たとえ失敗してもそこから学べることは必ずあるし、それを気にするよりもむしろ、これからは常に前向きにどんなことにもでも挑戦していきたいです。このように多くのことを学ぶことができたのも、この研修に関わる全ての方々の支えがあったことです。本当にありがとうございました。

シドニーでの短期留学を終えて

生活科学部 人間生活学科

1年 笹谷 茉央

この研修に参加した動機

高校生の時から漠然と「大学生になったら留学がしてみたい」という思いがあり、春休み中が自分の都合にも良かったので思い切って短期留学をしようと決めました。以前から留学するのならなんとなくオーストラリアが良いなと思っていたこともあったのですが、多文化主義の国に実際に訪れてみたかったのと、インターンシップがあるということに惹かれてこの研修に決めました。もちろん英語力の向上も理由の一つでした。

ニューサウスウェールズ大学(4週間)

シドニーでの最初の 4 週間はニューサウスウェールズ大学で英語を学びました。初日にテストを受け、次の日からレベル別のクラスで授業を受けました。私はクラスにお茶大の子がおらず最初は不安でしたが、この時期は日本の大学生が多かったのもあってすぐに友達はできました。私のクラスは日本人がほとんどで、他の国から来ている子は 3 人だけだったので日本語が飛び交う場面もよく見られました。しかし、授業は全て英語だったのと、徐々に打ち解けてきたのもあり、少しすると国は関係なくみんな本当に仲良くなって最後にお別れするのが寂しかったです。授業の内容としては基本的な文法も習いましたがスピーキングを重視した授業で、英語でコミュニケーションをとることがとても求められました。先生はとても優しく、またフォローしてくださるので英語に自信のなかった私でも楽しく授業を受けることができました。



Forest Childcare でのインターンシップ(2週間)

私は保育に興味があり幼稚園教諭の免許を取得したいと思っているので、幼稚園でのインターンシップを希望しました。片道 2 時間かかったことと勤務時間が長かったことは少し大変でしたが、何より子ども達がとても可愛く本当に良い経験をさせてもらったと思っています。大学で 4 週間勉強してからのインターンシップだったものの、最初は子ども達の言っていることが全然聞き取れないし、日常で使う表現も分からず、何と言って話しかければ良いのかとても戸惑いました。しかし、子どもたちがすぐになついてくれたことや、先生方とも話すことでだんだん馴染むことができ、疲れつつも充実した毎日でした。もっと保育を専門的に学んでから行けば違った見方もできたのかもしれませんが、今の私なりに子どもと関わりとても楽しめたと思っています。

シドニーでの生活（ホームステイ・観光など）

私のホストファミリーはインドネシア人で、英語が母語ではなく発音の仕方でも少し違ったので、最初はとても聞き取りづらく、私の言っていることもあまり聞き取ってもらえませんでした。私の他にも留学生がいましたが、みんなそろってご飯を食べるわけではなく、自分の部屋にすることが多くて自由な感じだったので、ホームステイってこんなものなのかなと最初は少し不安に思っていました。しかし、ホストファミリーも留学生もみんな優しく、毎日少しずつ会話する中で仲良くなれました。また、大学の授業が13時半までだったので放課後は毎日友達とシドニー観光を楽しみました。動物園に行ってコアラやワラビーを触ったり、ブルーマウンテンやビーチに行ったりとたくさんの思い出ができました。

全体を振り返って

最初は英語を話すこと自体に抵抗がありましたが、海外で6週間暮らす中でそれがなくなったことが大きかったなと思いました。まだスラスラと会話を楽しむレベルまではいきませんが、ホームステイや授業を通してそれぞれ違う言語を話す人間が英語という共通言語で意思疎通を図ることができるのはとても重要なことだと思い、英語を学ぶことに対するモチベーションが上がりました。また、オーストラリアには本当にいろんな国の人が暮らしていて、かつ昔白豪主義が本当にあったのかと思うほど、それが当たり前のように感じました。日本だと学校には日本人が大半というのが普通かもしれませんが、私の行った幼稚園も白人の子もアジア系の子も肌が黒い子もいて、みんな仲良く遊んでいました。そのような光景を自分の目で実際に見ることができたのはいい経験でした。

私にとってこの留学は初めての海外だったので不安に思っていたこともたくさんありましたが、思い返すと本当に毎日が充実していて濃い6週間でした。この研修を通して今後の自分に役立つ良い経験ができたと思っています。



Sydney 短期研修報告



文教育学部 言語文化学科

1年 鮫島 薫乃

前々から留学に興味があり、また英語を話さなければならぬ環境でのインターンシップというものに惹かれ、シドニーでの短期研修に参加しました。また、自分はシャイなところがあり、消極的な部分を海外でなら変えられるのではないかという期待もありました。今回の研修が、自分に

とって初めての海外ということもあり、不安も多かったのですが、私は楽しみという気持ちのほうが勝っていました。

帰国して、率直に私が思ったのはまたシドニーに行きたいということです。シドニーでは本当にたくさんの方のことを学び、貴重な体験をたくさんすることができました。またシドニーに戻りたいと思えるまでの経験をすることができ、それを手助けしてくださったたくさんの方々へ感謝したいと思います。

○UNSW 語学研修

私は、シドニーに行く前は、ほぼ英語での会話の経験がないといっているほどだったので、テストやクラス分けに不安を覚えていました。私のクラスはクラスのほとんどが日本人で、ここでの学習で英語力が向上したかという正直わかりませんが、英語で話したりプレゼンテーションを行ったりと、とても充実していたと思います。4週間の語学学校であらゆる地域の人と友達になったり、観光したりととても楽しむことができました。

○ホームステイ

私のホームステイ先は70歳のおばあちゃんが一人のお宅でした。正直にいうとステイ先はあまり私に対して親切ではありませんでした。おばあちゃんは、気分の浮き沈みが激しく、ちょっとしたことでものすごく怒られることが何度かありました。彼女の機嫌がいいときはたくさん話せたし、彼女の作るディナーはとてもおいしかったので、私は割り切って6週間過ごしました。全く知らない他人と暮らすという難しさを思い知りました。

○St. Paul's Catholic College でのインターンシップ

このシドニーの短期研修において何が一番楽しかったかと聞かれたら、私は迷わず St. Paul's Catholic College でのインターンシップと答えます。日本語の授業で teaching assistant として二週間、マンリーにある中高一貫校に通いました。先生方も生徒もとても



親切で温かく接していただき、たくさんさんの貴重な経験をする事ができました。生徒たちに自分から積極的に話しに行くことで、生徒とコミュニケーションをとることができ、仲良くなる事ができたと思います。生徒たちとのコミュニケーションは本当に楽しかったです。私が言いたい単語がなかなか出てこないとき

や、知らない単語があったときには、生徒は言葉を待ってくれたり、言いたいであろう単語を予想して出してくれたりと本当に優しい子どもたちでした。また私が日本語学習のサポートをするだけではなく、子どもたちから英語を教えてもらうことも多く、とても良い勉強になりました。日本語の授業だけではなく、音楽や技術の授業にも参加する機会をいただき、日本とオーストラリアの学習方法の違いなども見えてとても興味深かったです。この学校での経験は一生忘れられないものになりました。

○最後に

英語力について私は、これからまだまだ学習が必要だと感じました。英語を話したいと思える理由と目標を持つ事ができたので、日本でも英語を使う機会を積極的に探していこうと思います。シドニーの短期研修で私は、消極的な自分を少しは変える事ができました。この研修では本当に多くのことを学び、とても貴重でかけがえのない経験をする事ができました。今後も国際交流をしていきたいです。

シドニーでの経験から得たもの

文教育学部 言語文化学科グローバル文化学環

2年 須之内 萌

・UNSW 語学学校での授業

授業内容自体は、それほど難しいものではなかったが、受け身ではなく、自分から積極的に発言していく姿勢が求められた。そのせいか、1コマ2時間の授業も長く感じず、あっという間に終わってしまっていた。ただ、私のクラスはほとんどが日本人で、日本人ではない学生が2人しかいなかったのもっといろいろな国から来た学生と一緒に授業を受けたかったというのが本音である。

・ホームステイ

私にとって最も心配だったのがホームステイであったのだが、とても充実したものになった。ホストマザーは、フィリピン人であり、5年ほど前から常にたくさんの学生の受け入れを行っている。彼女はフルタイムで働いていたが、夕食のときなどにはたくさん話をするのができ、本当に楽しかった。私の将来のことや、社会的な問題などについても、ときにはお互い意見を言い合って、英語力だけではなく、もっと大切なことを吸収できたような気がする。インターンが大変で、マザーに相談したときも、いろいろなアドバイスをしてくれて、精神面でも助けてもらうことが多かった。

・Let's go surfing でのインターン

英語力が必要ということで、事前に面接（ただ座ってお話をするだけだったが）を行った。無事受け入れてもらえることになり、Bondi Beach の Let's go surfing というサーフィンスクールで2週間のインターンを行った。日本人は私以外1人もおらず、Aussie アクセントの強い英語を話す人が多かったのも、最初のうちは英語を聴きとるのがとても大変だった。毎朝6時に起きて、1時間以上かけて職場に行き、朝9時～夕方5時まで働いた。英語力、精神力、体力…すべてを使うものだったので毎日ヘトヘトになって、行きたくないときもあつたが、終わった今となっては、ここでインターンをして本当に良かったと思っている。仕事内容としては、レッスンに来たお客さんの対応、レッスンの準備、レッスンの写真を撮ってそれをアップロードし、お客さんに買ってもらうようにすすめる、ツアーに来ているグループに Bondi Beach をガイドする（私は実際にはガイドはしていないが…）など非常にたくさんあつた。他にも、Bondi Beach の周りにあるホテルなどに事前に連絡をして、フライヤーを置きにいたり、私自身が無料でサーフィンのレッスンを受けたり…と様々な体験をさせてもらった。基本的には、あまり詳しくそれぞれの仕事を教えてもらえないので、自分から「このやり方を教えてほしい」「これやってみよう」と言わなくてははいけなかった。最初はとまどいもあつたが、それも、日本とは異なる点なのだろうと感じた。また、レッスンやツアーにはいろいろな国から来ていた人がおり、Let's go surfing のインストラクターの中でも様々なバックグラウンドを持

った人が集まっていたので、そういった人たちと話をできたことは貴重な経験になったと思う。

・観光

放課後や週末など時間はたくさんあったので、いろいろなところを訪れることができた。今まで写真でしか見たことのなかったオペラハウスに行き、実際に中でオペラをみたり、ブルーマウンテンのツアーに参加したり、タロンガズーというとても大きい動物園に行ったり…など。文化を肌で感じることもできたと思う。

・最後に

実は渡航する直前になっていろいろな不安が重なり、行きたくないと思ってしまい、このプログラムに参加したことを後悔していた。しかし、今は、なぜそのようなことを思っていたのか不思議なくらい、このプログラムに参加して **UNSW** で学んだこと、**Let's go surfing** でインターンをしたことを誇りに思っている。シドニーで生活して1番感じたことは、いろいろな種類の英語があるということだ。それぞれに特徴があるので、どれが正しいとか良いとかではなく、それぞれを受け入れていくことが大切なのだと気付くことができた。また、私はもともと消極的なほうではなかったが、このプログラムを通して、より積極的に行動すること、良い意味で大胆になることができたのではないと思う。特にインターンで、完全に **Aussie** の環境で働いたことで自信につながった。英語力も含め、この経験をどう活かすかは今後の自分次第である。改めて今後の大学生活、そして将来を考えるきっかけにもなった。シドニーで出会った全ての人、もの、そして経験をこれからも大切に自分の強みにしていきたい。



UNSW 研修帰国報告書

文教育学部 言語文化学科

2年 椎木 優海

研修内容 UNSW にて 4 週間の語学研修後、2 週間のインターンシップ。インターン先は希望により学校での日本語アシスタントもしくは企業での研修か選択可能。

研修期間 2016. 2. 5～2016. 3. 22

参加目的 英語でのコミュニケーション能力の向上。副専攻である日本語教育の現場を直接見て体験すること。

1. UNSW での語学研修について



初日にオリエンテーションがあり、その後クラス分けテストが行われた。クラス分けテストはそんなに神経質になる必要はなく、講師との対談のような形で行われた。翌日から **General English** の授業を受講した。授業内容としては 1 つのトピックを取り扱う中で文法構造やリス

ニングを行い総合的に英語の勉強をしていた。日本のような講義形式ではなく説明を受けた後にグループでその文法を使ってディスカッションをするなど発信することが多いと感じた。授業後は友人と出かけたり、学校の主催するイベントに参加したりしており、イベントに参加するごとに日本人以外の友人が増えていった。注意すべきなのは目的を忘れないことである。何故ならば語学学校には日本人も多く、日本語だけで生活することは容易であるためだ。実際にクラスの中でずっと日本語を話している学生もいた。もちろん日本人だけでなく母国語を使用している学生は多くいたが、英語で話しかけると応じてくれるのでめげないことが大切だと感じた。



2. インターンシップについて

先述した通り私は日本語アシスタントという希望を出し、中高一貫の男子校で日本語のクラスを受講している生徒のサポートを行った。授業を受けると言う受動的な状態

から突然自分から動かなければ置いていかれる状況におかれて戸惑いもあったが今回の研修の一番の目的がこのインターンシップだったので苦痛には感じなかった。先生方はとても親身になってくれたため、私ともう一人同じ研修先だった本学の学生と共に企画した授業を実行させてもらうことができ、生徒との距離も縮まりその後の活動もより一層充実した。生徒から英語を学ぶことも多々あり、語学力の向上にもつながった。現場での日本語教育に触れることで日本語を学ぶ人にとってどこが躓きであるのか、どのようなサポートが必要なのか考える機会を得た。



3. ホームステイについて

ホームステイが渡航前の私にとって最大の問題だった。しかし、私はホストファミリーに恵まれ家の中でも快適に過ごすことが出来た。ステイ先に関しては人それぞれとしか言いようがないが、一番大切なのはわからないことがあったら何度でも繰り返して聞いて確認することである。小さなことでもトラブルになりやすいので後から会話を思い返してみて確認がないならば手を変え言葉を変え聞いてみると良い。ファミリーとのコミュニケーションにもなる上、色々な言い方を考えるために表現方法も増えていく。

4. 研修を終えて

当初の目的であった「英語力の向上」は達成されたと感じているが、最も大きな収穫は「まだ足りない」と感じる事が出来たことである。漠然と語学が好きだからと勉強していた中高生時代よりもこの6週間の方が伸び率は大きかった。「この人の言うことを理解したい」という考えが英語を学習する目的となったからである。ここで出会った縁はすぐに切れるものではないため、これから先私が英語力を伸ばすにあたっての大きな一歩だったと感じている。今回の研修で得られたものを今後の生活にどう生かしていくかを考えて実践していきたい。

ニューサウスウェールズ大学での研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1年 嶋田 有莉

授業内容

一般英語を学びました。スピーキング中心で、沢山会話することを求められました。英語で話すということに慣れていなかったため、最初はとても苦労しました。プレゼンテーションの際には周りのみんなが英語ペラペラだったため、圧倒され、涙を流してしまいました。しかし今思うと、周りのみんなができるからと言って変に気負わずに自分らしくプレゼンテーションを行えばよかったなと思います。プレゼン以外の授業は難易度がちょうどよく、適度な緊張感をもって楽しく臨め、良かったです。

課外活動

最初の週はお茶大の同学年の友達と一緒に放課後や週末に様々な場所にお出かけしました。初めはそれほど親しくなかったお茶大の仲間と徐々に仲良くなれてとてもうれしかったです。私はインターンが13時で終了し沢山時間があったため、後半は現地の学生と遊ぶよう心掛け、積極的に国際交流するようにしました。

・ブルーマウンテンへのツアー

UNSW に紹介された **Colorful trip** というツアー会社のツアーに友達と参加しました。費用は1万円くらいと少し高かったのですが、ガイドさんが面白い方で、それぞれの観光スポットにまつわるとても興味深い話をたくさん聞かせてくれるながらの旅だったので、とても有意義なツアーでした。しかし、このツアーの参加人数が少し多かったため、送迎バスに乗り込む駅を別にした友達とは別行動になってしまい、少し焦りました。そのため、このツアーに参加する際には友達と同じ地点からバスに乗ることを強く勧めます。ブルーマウンテン自体はとても雄大で素晴らしく、今まで見てきた風景の中で一番素晴らしいのではないかと思うくらい良かったです。

・マーケット巡り

週末になると沢山のマーケットが開かれており、それらを見て回るのはとても楽しかったです。ハンドメイドのオーストラリア産のソーブやキャンディ、アクセサリーなど現地ならではのものが買えました。

・NSA のメンバーとのたこ焼きパーティ・カラオケ

UNSW の日本語サークルのメンバーと最後の週に沢山交流をしました。たこ焼きパーティーではメンバーがたこ焼きプレートを持ってきてくれ、会話を楽しみながらおいしいたこ焼きが作れて大満足でした。カラオケでは NSA のメンバーが沢山日本の歌を歌ってくれ、そのあまりの上手さにとても驚きました。

インターンシップ

私は Neutral Bay Public School でキャンティーンをしました。保護者とのコミュニケーションや、お金を持たず食べ物をねだってくる子供たちへの対処法など課題は山積みでした。しかし日々の分析や、インターン先が同じだった友達との会話、週に一度の研修を重ねるうちに自分の進むべき方向が見え、最終的に満足のいく形で終えることができました。

ホストファミリー

私のホストファミリーは70代のおばあさんで、とても優しく、また留学生を何人も受け入れた経験のある方だったためとても接しやすかったです。お土産に桜のリースや手鏡を持っていったら感激してくれてとてもうれしかったです。バレンタインデーには感謝の気持ちを込めてチョコを渡しました。私なりに少しずつ打ち解けるのを心掛け、日々の生活の中で交流があまり負担にならないようにしました。

まとめ

今回、短期での留学でしたが私は6週間海外に滞在したことはなかったためとても怖かったです。しかし、よい人に沢山巡り合えたため充実した研修を送ることができました。また英語力をあげなければと身に染みて感じたため、これから精いっぱい努力してゆきたいです。

またいつか必ずシドニーで仲間たちと再会できたらな、と思っています。

オーストラリア UNSW 研修を終えて

生活科学部 人間生活学科

1年 八田 えみり



授業について

UNSW の附属の語学学校に 4 週間通い、お茶大生はスピーキングを中心とした **General English** コースの授業を受けました。コース内では登校初日に受けたテストの成績を元にクラス分けがされ、私は一番上のクラスの **GE6** というクラスに配属されました。

授業は **Reading, Grammer, Writing, Discussion,**

presentation などの様々な内容のものがあり、満遍なく勉強できたと感じています。クラスメイトの皆さんは、日本人の方が半分近くいらっしゃいましたが、外国人の生徒さん方が色々な国から来ていらっしゃって且つ幅広い年代の方々だったことが印象的でした。授業が始まった当初は、クラスの他の生徒さんがネイティブのように流暢に英語が話せる方が多く、周りとのスピーキングの能力の差に「これから授業についていけるだろうか」と不安に感じていました。また、やはり日本とは異なり授業では常に自発的に発言することが求められ、留学に来たからにはそのスタイルを実践しようと思って臨んでいましたが、英語の会話のテンポが上手く合わせられないことと自分が伝えたいことを英語でどう言うべきかを考えているうちに話が終わってしまうという事態に陥ったことで、最初の頃はなかなか積極的に発言することが出来ませんでした。ですが、次第に授業の雰囲気やテンポにも慣れ、4 週目には答えが間違っていたとしても一回の説明で理解してもらえなくても自発的に発言したり自分の意見を伝えたり出来るようになり、自分から英語を話すことへの抵抗が減っていったことは大きな成長であったと思っています。普段の大学の授業では体験できない新鮮な授業を受けることができ、とても満足しています。

インターンについて

私はインターンシップとして、現地の幼稚園に 2 週間訪問させていただきました。事前オリエンテーションでは、専門が保育学ということもあり幼稚園や保育園に行きたいという希望は出していましたが、前例がない行き先ということで行かせていただけるか不確定であったため、本当に幼稚園に行かせていただけて、とても良い経験になりました。実際に行った仕事としては先生のお手伝いがメインであり、子どもたちの食事の準備・後片付け、部屋の掃除、安全を確保しながら子どもたちと遊ぶなどといったことをしていました。また、あるクラスでは担任の先生が私に工作の時間を任せて下さったり、日本語の童謡を子どもたちに教える機会を下さったりして、自由に色々なことに挑戦させてもらえました。幼稚園側の計らいで 2 週間かけて、年齢の異なる全クラスに入ることができ、子どもたちの発達の違

いやそれによる大人の関わり方の違いなどを間近で見ることが出来たとともに、日本とオーストラリアの保育の仕方の違いを直接学ぶことも出来たため、大変貴重な経験になったと感じています。インターンを通して、語学学校では学びきれないネイティブの方の本当の会話のテンポや言い回しを知る機会になり、自分自身の英語の上達を促すきっかけになったのではないかと考えています。幼稚園まではバスと電車を乗り継いで片道2時間の道のりであり、子どもたちの英語が分からないなどの困った点もたくさんありましたが、英語に関してだけでなく自分の専門分野のことについても深く学べたことで、インターンを経験できて本当に良かったと思っています。

オーストラリアでの生活について

私はシドニーの南側に位置する ifley (イフリー) という場所で一ヶ月半の間ホームステイをしました。ホストファミリーの方がベッドと机と簡易クローゼットが備え付けられた小さな個室を与えて下さり、適度にプライベートが確保されつつホストファミリーやハウスメイトの方とコミュニケーションも取りやすい生活空間で過ごしやすかったです。ホストファミリーの方と生活時間が噛み合わず、なかなか直接お話し出来ない日もありましたが、日本文化に興味のある方々だったこともあり、いつも気さくに話しかけて下さりました。食事の面では、朝食と夕食はホストマザーに準備していただけて、自分で購入するのは基本的には昼食だけでした。物価は少し高く感じるものの食事などは割と量が多いため、東京で購入するのと同等の感覚で対応していました。

また、家からの移動には最寄りの交通機関がバスであったことからバスを頻繁に使用していました。学校まではバスで 25 分程度、シティまでは 45 分程度で着く距離にありましたが、ただ一つ困った点として、バスが時間通りに来ないことが多かったこと、下車に関するアナウンスがされず自力で下車するバス停を見つけ出さなければならないことなどがありました。シドニー内共通の IC カードである「opal」は全ての公共交通機関に使用可能であり、週に 8 回以上乗車するとそれ以降の料金は無料であるというシステムを利用して、週末は行きたいところに自由に行くことが出来ました。シドニーでの生活は、日本では経験出来ないことにたくさん触れ、自分の常識に縛られずに物事に柔軟に対応する力も身付けることができ、本当に楽しかったです。





UNIVERSITY *of* OTAGO
TE WHARE WĀNANGA O OTĀGO

参加者 7 名

オタゴ大学春期語学研修を終えて

生活科学部 食物栄養学科

2年 須澤 理恵

・研修に参加した動機

私がこの研修に参加した動機は、英語でのコミュニケーション能力を向上させたかったからです。私はもともと英語が好きで勉強してきましたが、それはリーディングや文法が主で、日常会話に必要なリスニングやスピーキングが弱いと実感していました。そこで、毎日英語を使わざるを得ない状況に身を置くことで、それらの力を伸ばす



ことができると思いました。留学先にオタゴ大学を選んだ理由は、ホームステイができること、インターンシップに参加できること、大学の正規授業を聴講できること、ニュージーランドは季節が夏から秋で過ごしやすそうだったことでした。

・研修プログラムの内容

研修プログラムの主な内容は、**Language Center** での授業、オタゴ大学正規授業の聴講、インターンシップでした。

Language Center では、**TOEIC** の授業を1日1～2コマ、**General English** の授業を1日3コマずつ受けました。日本以外では**TOEIC** が必要とされていないこともあり、**TOEIC** のクラスは全員日本人でした。これには少し驚きましたが、**TOEIC** 独特の解き方のコツを学ぶことができ、ためになりました。**General English** のクラスは、日本の他大学の学生に加え、中国、スイス、ドイツ、タイなど様々な国出身の学生が一緒でした。他国の生徒は授業中に分からないところを即座に質問したり、どんどんと発言をしたりと、日本人とは授業を受ける姿勢が異なり、とても刺激的でした。授業中は、生徒同士でディスカッションやグループワークをすることが多くありました。そこでも彼らは、積極的に自分の意見を述べており、私は自分の英語でのコミュニケーション力の乏しさと、国際情勢や歴史についての知識の貧しさを実感しました。これらは日本には気づきにくいので、これらを発見できたことは大きな収穫だったと思います。

また、わたしの専門である栄養学の正規授業を聴講しました。授業の内容はすでに習ったものだったのでほとんど理解することができ、授業を楽しむことができました。専門用語をどのように英語で言うのかや、海外の大学の授業の雰囲気を知ることができ、良い経験になりました。

さらに、私はインターンシップとして週に1回小学校に行きました。生徒に折り紙や勉強を教えたり、休み時間に一緒に遊んだり、時には一緒に歌を歌ったりダンスをしたりと



とても楽しい時間を過ごしました。また、ニュージーランドの教育は日本と異なる部分もあり興味深かったです。

・ホームステイでの体験

私のホストファミリーはマザーと15歳のシスターの2人でした。2人とも忙しく、家にいない時間も多かったです。そのため、一緒にいられる時間を最大限に活用しようと、

夕食前後や休日のランチの時間にはファミリーと様々な話をしました。また、マザーは交友関係が広く、様々な人を紹介してくれたので、たくさんの人と出会うことができました。マザーはライフワークバランスを上手にとっており、これは日本でも見習わなければならないと感じました。

・研修を通じて学んだこと

研修を通して、何事にも貪欲に取り組むことが重要だと実感しました。この研修中、様々な学びや体験のチャンスがありました。6週間という短い期間しか滞在できなかったため、なるべく多くを学んで帰ろう、とそれらに積極的に参加しました。そのため、わずかかもしれませんが英語力を向上させ、貴重な体験をたくさんすることができました。

・今後の海外留学、国際交流活動への意欲

今回の研修を通して、他の国の人と話すことは楽しく、しかしそのためには英語のコミュニケーション力が必須だと改めて感じました。研修中に、自分の意見や気持ちを上手く他の人に伝えることができずにもどかしい思いを何度もしました。研修前は英語学習の目的が見いだせず、モチベーションが上がりませんでした。今後は色々な国の人と会話を楽しみたいという目標を見つけることができました。今回のような語学研修はもう参加しないと思いますが、日本で、自分で積極的に英語に触れる場に出向き、英語を学習し続けようと思います。

オタゴ大学短期研修を終えて

文教育学部 人文科学科

1年 大垣 志織

授業について

授業は1クラス最大15人ほどの少人数授業でした。1日5コマ（1コマ50分）、授業があります。（9:00-15:00）そのうち、2コマがTOEIC(もしくはIELTS)のクラスになっていて、Reading, Listeningを中心に試験対策を行いました。残りの3コマはGeneral Englishという総合的な英語力を高めるための授業を受けます。このクラスでは、Reading, Listening, Writing, Speakingを総合的に学ぶことができます。授業中に生徒同士で話し合う機会が多く、他の国から来た留学生との考え方や文化の違い、共通点を知ることができ、とても面白かったです。また、先生はとてもフレンドリーで、真面目に授業を受けつつ和気藹々とした雰囲気もあり、のびのびと授業を受けることができました。

インターンシップについて

私は観光地としても有名な、ニュージーランド最古の植物園である“Botanic Garden”でインターンシップをすることができました。植物園の中には、バラ園や日本庭園、ハーブガーデンなどがあり様々な植物を楽しむことができ、とても素敵な植物園でした。ここでは、主にスタッフの方と共にガーデニングをしていました。屋外での作業もあるので、汚れても良い服とスニーカーが必要です。

ニュージーランドの生活について

2月、3月は日本の大学の春季休暇と重なるため、オタゴ大学の language center の学生は日本人が多く、その他の留学生もほとんどがアジア出身でした。ですが、大学には様々なプログラムがあるので、自分から動けば沢山の人と出会うことができます。私は、English Conversation Community という英語で様々な国の人とコミュニケーションをする会に参加していました。ニュージーランド人をはじめ、バングラデシュや韓国などの学生と交流することができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。

オタゴ大学があるダニーデンは、学生の街として知られています。そのため、イベントなどがあるときは、街はとても賑やかになります。また、気をつけていれば夜も外出できるほど安全でした。

今回の私の留学の目標は speaking 力を高めることでした。なぜなら、日本では日常的に英語を使う機会があまりなく、この能力を向上させるのは難しいと感じていたからです。具体的には、夕食時のホストファミリーの会話を理解し、スムーズに会話に参加できるようになる事を目標として掲げていました。やはり完全に内容を理解するのは難しく、目標を達成したとは言い難いのですが、最終的に楽しく会話に参加できるようになりました。本当に小さな目標でしたが、目標を明確に持ったことで、日々の成果を実感することができました。

最後に、ホストファミリーをはじめ、クラスメートや先生など、多くの素敵な人たちに会えたことが、今回の留学の中で一番大きな収穫でした。国籍を問わず、多くの人と触れ合えたことで、多様な考え方を学ぶことができ、物事に対する視野も広がったと感じています。私の英語力では、なかなか思っていることを的確に伝えることができず、もどかしく思うことも沢山ありました。また、意思疎通が図れないというのは、はじめのうちはストレスでもありました。ですが、積極的に話し続けたことで、多くの人と会うことができました。これらの人々と過ごした時間は、とても楽しく、私にとってとても貴重な経験です。今回の留学の経験を生かして、長期留学に挑戦してみたいと思っています。

家族をはじめ、ホストファミリー、今回の留学に携わった全ての人に感謝します。ありがとうございました。



オタゴ大学研修報告

文教育学部 言語文化学科

2年 池田 祥子

～はじめに～

私は真面目な生徒ではなく今回の留学ももちろん英語力をのばしたいという思いは大前提でしたが正直旅行を兼ねて楽しめればいいやという思いで参加しました。そしてはじめは集団が嫌だったので大学のプログラムを使うのではなく個人でどこかの春季プログラムに行こうと考えていたほどで留学に行く前はそれほど大学のプログラムに対する期待感はありませんでした。ですが今はオタゴ大学を選んで本当に正解だったと心から思います。

～つらかったこと～

行ってみてわかったのはしゃべることにはしゃべるのですが、詳しく英語でなにかを伝えコミュニケーションをとるのは難しく頑張ってはみたものの6週間では環境に慣れることに必死でそこまでのレベルにはいけなかったということです。そもそも英語も日本語もすべての言語はなにかを人に伝えるための手段であって、なにか伝えたかったりする内容がなければまずしゃべることなんてできないなということを感じました。授業中は積極的に自分の言いたいことを英語で表現しようとはできたと思うのですが、もともと集団が得意ではなく授業外の部分ではクラスメートの陽気なノリに慣れることに必死でコミュニケーションが難しくそこに悩みました。またクラスメートのタイの女の子は自分の好きな映画のストーリーを事細かに説明してくれ私にはできないので、すごいと思ったのと同時にできない自分が悔しかったです。つらくなったときには頑張りすぎず適度に休みながら学びたくさん遊ぶことで気持ちが楽になりました。

～楽しかったこと～

つらかったこともたくさんありましたが楽しかったこともたくさんありました。ホームステイをしたのですが私はホストマザーと二人で暮らしていました。自分の時間をたっぷりとれてとてもリラックスできてこの家でよかったと思いました。マザーとはよく会話をしたので英語力向上にも役立ったと思いましたしマザーは料理が得意で毎週ケーキを作ってくれまた毎日の料理も野菜中心のヘルシーでおいしいもので最高でしたし、太りませんでした。マザーは自分の好きなことをして豊かに過ごしていて、私もなにかしらせかせかして時間があれば寝ていただけの日本での生活を改めマザーのような生活をしたと思いました。ある日家に友達を呼び日本食をマザーにふるまったのですが本当に楽しかったしその後マザーが私たちを丘に連れて行ってくれ満月とたくさん星と月に照らされて銀色に光る海を見てとても感動しました。留学中の一番の思い出です。バンジージャンプもしましたし有名なファッションショーにもラグビーの試合にも行きました。お金は飛んで

行ったけどプライスレスな経験を数えきれないほどでき大満足です。クラスメートのサウジアラビアの女性とイスラム教のことやたくさんのお話を話したのですが、とても素敵な女性で話していて本当に楽しく英語で会話をするのはやっぱり楽しいなと感じました。

～お茶の水女子大学の仲間や日本人学生との出会い～

私たちお茶大生はこの研修に合計7人で参加したのですが、多すぎず少なすぎない最適な人数でみんなとても優しく明るくそして英語を学ぼうという姿勢が素晴らしく一緒に学べて本当によかったです。私たちは日本人でいるときにも決して日本語を話さず英語でのみ会話をしていました。日本の大学の長期休暇の時期なので語学学校には本当に大量の日本人がやってきていました。中には日本語ばかり話す人もいましたが私は気にせず他大学の日本人に対しても英語で話していたので、たまに留学体験記等で見かける日本人同士で集まって日本語をはなしてしまったことの後悔というものはありません。留学に行く前は日本人とは話さん！と思っていたのですが、日本人がたくさんいてそれも含めてたくさんの新しい出会いがあるのにそれをふいにするのは良くないと思いました。私はこの留学にきていきなり本当に素敵な友達がたくさんできました。この出会いは留学の中で大きな収穫だったと思います。

～最後に～

何事に対しても慣れるのに時間がかかる私にとって6週間は短く英語はまだまだなのでその点がとても悔しいですが、数えきれないくらいの貴重な体験をできこの6週間は私の宝物です。戻りたいくらいです。行く前は英語をしゃべることに難しさを感じていましたが、留学中の授業などを通してとりあえず言いたいことを伝えることがまず大切で間違ってもいいや！とりあえず話そう！と思えるようになり前向きにしゃべることができるようになりました。一番の収穫です。この研修によってさらに英語を学びたいという気持ちが強まりました。支援してくれた家族に感謝の気持ちでいっぱいです。この研修に行ってよかった～



オタゴ大学短期留学を終えて

生活科学部 食物栄養学科

2年 尾崎 沙織



授業内容

Language Centre というところで TOEIC または IELTS の選択授業と General English という総合的な英語を学べるクラスがありました。General English のクラスはレベル別のクラスなので、英語が苦手なわたしも楽しんで学ぶことができました。その他のプログラムとして、インターンシップと大学の授業の聴講がありました。インターンでは週に一度小学校

に行きました。とてもフレンドリーな子ばかりで、みんなで仲良くおしゃべりをしながらたくさん活動をするのができ、とても楽しく良い経験になりました。大学では栄養学に関する授業を聴講しました。いくつかの授業の内容はすでに日本で習っていたことなので、英語でも理解することができ、とても面白かったです。

課外活動

大学が色々なツアーを安く用意してくれてニュージーランドを思い切り楽しむことができました。

○Peninsula Tour

日帰りバスでダニーデンのすぐ近くのオタゴ半島に行きました。とても歴史のあるラナーク城の見学をしたり、アルバトロス(とても大きな海鳥)やアザラシを見るためのクルーズをしたり、日本ではみることのできない種類のペンギンを見に行ったりと、ここでしかできないことが一日で体験できてとても良かったです。

○Queens Town Tour

一泊二日で南島の大きい街の一つであるクイーンズタウンへ行きました。本当にたくさんのことを体験できましたが、特にハカというニュージーランド先住民の伝統的なショーを見れたことはとても貴重だったと思います。またニュージーランドが発祥の地だと言われているバンジージャンプにも挑戦しました。最高に楽しい 2 日間を送りました。クイーンズタウンはショッピングの場所もたくさんあるのでおすすめです。

その他にも大学のあるダニーデンでたくさんのビーチに行ったり、丘を登って街を一望

したり、とにかくたくさん絶景を楽しみました。ダニーデンの夜空もとてもきれいで、南十字星をみられたことは本当にいい思い出です。



ホームステイの生活

私のホームステイ先は、ファザー、マザー、3人のシスターの5人家族でした。シスターたちは8歳6歳4歳のとても小さい子どもたちで、元気いっぱい駆け回っている姿に毎日癒されました。ファミリーは本当に親切で、週末にはダニーデンの素敵なお場所にたくさん連れて行ってくれたり、ニュージーランドの伝統的な料理やお菓子をたくさん作ってくれたり、アパート暮らしでは体験することのできないことを体験できました。留学中に3回日本食を作ってファザーとマザーに食べてもらったのですが、どの回もとても喜んでくれてすごく嬉しかったです。私自身食べ物に関する話がとても好きで、ホストマザーも料理が得意でそういう話が好きだったので2人で日本食やニュージーランドのご飯について話す時間がとても楽しかったです。みんなゆっくりはっきりと話しかけてくれた上に、私が話すときは、どれだけ時間がかかってもちゃんと待って領いてくれたおかげで、人と英語で話すことに不安があった私でもいっぱい会話することができて、本当にいい経験になりました。ホームステイ先が自分と合うかどうかは運だと聞いたことがありますが、私は本当にいい家族に出会えました。ホームステイの留学を選んで、たくさんの体験ができて本当によかったです。

留学を通して感じたこと

Language Centre では色々なアジアの国の人たちと勉強をしたのですが、日本人は文法や語彙をたくさん知っていて読解がちゃんとできているのに、リスニングやスピーキングの練習が全く足りていないせいで、全然会話ができていないな、と思いました。逆に他の国の人たちは、難しい単語を知らなくても、シンプルな会話表現がスラスラと出てきていたり、ネイティブの人たちが話すことは1回で理解できていたりしてすごいなと思いました。確かに英語の文献を読むためには日本の英語教育は正しいのかもしれませんが、実際に外国人とコミュニケーションがとれないなんて、それでいいのかと疑問を持ちました。今回の留学で母国語が違う様々な国の人たちとコミュニケーションをとれたことは私にとってとても貴重な体験となり、とても大きな喜びを感じました。そしてより一層英語を学びたいという気持ちにさせてくれました。もちろん文法、語彙を増やす勉強を止めてもいいとは思いませんが、これからはもう少し英会話ができるよう、リスニング、スピーキングの練習を増やしていきたいと思います。

Studying Abroad in Dunedin

Faculty of Letters and Education

Liberal Arts and Humanities

1st Grade Riko Homma

1. The reason why I decided trying to study abroad

When I was a high school student, I went to the U.S. because of my school's homestay program. The differences of culture attracted me so much, and I wanted to learn other cultures more and more. However, the program was for three weeks, which was quite short staying for me. This studying abroad was for six weeks which was twice as long as my first homestay. I thought it can be preparation of long term studying abroad.

In addition, I had wanted to go to New Zealand since I was a junior high school student because I learned about New Zealand little bit at the school. I really wanted to watch Kiwi birds. Also, Japan, especially city has little nature. New Zealand has a few number of people and big amount of nature. I'd never experienced such a situation, so I thought it was good to expand my view.

2. Actually

To tell you the truth, the prospection was right. At first, I thought New Zealand's life style was similar to the U.S., but it was not. I could experience their culture and at last, I could see Kiwi bird! Watching Kiwi was my dream, so I was moved when I faced real Kiwi.

3. This program

Unexpectedly, the University of Otago language centre had a lot of Japanese student as well. The rule of the centre was that we had to speak only English during staying at the university. Ochanomizu University students kept the rule but the other students did not. However, I could join Advanced class which was the highest class and the students in the class were really good at English, came from various countries, and they can speak English very fluently. I could make friends with them and eat lunch with them every day. Fortunately, maybe next year, a friend of mine who came from Thai Land will come to Japan! I promised to show her my favorite place in Japan during her staying in Japan.

4. Homestay

Kiwi people (New Zealander call themselves as "Kiwi") were very kind and

listened to my speaking carefully even though my pronunciation was different from them. They had Kiwi accents and slangs which were quite difficult for me to understand, but they taught me such words when I asked them. However, there was one difficulty. My family had the other exchange student in their house and she was from China. She had strong Chinese accent which was difficult to understand. Also there were some difficulties because of cultural differences.

I learned that cultural differences are very interesting things but not always fun. However, we could overcome the difficulties. If I didn't go to New Zealand and do homestay, I couldn't experience such feelings.

5. Overall

I could learn lots of things which I can't experience in Japan through this studying abroad. New Zealand had really beautiful view and I couldn't believe the country is on the earth same as Japan. Six weeks were good length for me to improve my English skill. I hope my English skill could be much better than when I arrived New Zealand and actually, it is. I could think many things in English and I could use English every time in New Zealand, which were precious experiences.



↑ at Walter Peak Farm in Queenstown, New Zealand

オタゴ大学春期語学研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

3年 五十嵐 智美

○ 研修での生活

私が参加した今回のプログラムは、語学センターでの授業に加えインターンシップ、朝夕食事付きのホームステイ、オタゴ大学正規授業の聴講など盛りだくさんの内容でした。友人にお土産話をしようとしても何から話せばいいのかわからなくなってしまふほど、濃密な6週間でした。その思い出の一部を以下でひとつずつ述べていこうと思います。

まず、語学センターでの生活について、‘その建物内では英語を喋る’というルールのもとに休み時間も昼食の時間も英語漬けの日々を送っていました。クラスは一般英語とTOEICの2つに分かれており、スピーキングはもちろん、リスニングやリーディングなどの英語力をまんべんなく鍛える授業を週5日で受けていました。毎日英語を使っていると、自分の考えや気持ちを的確に表現することの難しさを改めて認識します。しかし、この語学センターでの生活を経て、‘とにかく伝えたいことに関する何かを言おうとすること’の大切さを学べたように思います。研修前の自分は、文法の間違いを気にしてしまい喋ることを避けてしまう傾向がありました。研修を終えた現在、0とまでは言えませんが、研修前と比べてそのネガティブな感情はかなり軽減されました。

毎週水曜日の午前中は教育インターンシップのため、地域の小学校に通っていました。子どもたちの授業に参加して勉強の補助をしたり、休み時間は一緒に遊んで日本のおもちゃを紹介したり、折り紙を教えたりもしました。その小学校の子どもたちは、「今から〇〇をするよ!」「これは△△なんだ!」と丁寧に彼らの生活を紹介してくれ、その親切な態度は非常に印象に残っています。この小学校では生徒ひとりひとりが皆の前で発言する機会が多かったり、先生のお手伝いを率先してやる子どもがたくさんいたり、日本の小学校と比べて自主性が育ちやすい環境のように感じました。文化の違いの面白さも発見することの出来るインターンに参加することができて嬉しく思います。



ホームステイ先では、ホストファミリーが本当に親切な態度で接してくれたため、私ははじめかなり緊張していましたが、そこでの生活に徐々に慣れていくことができました。私のホストファミリーは、家から少し離れたところに土地を借りてそこで5頭の馬とたくさんの羊を飼っているため、何度かそこに連れて行ったりもしてくれました。動物達をみるだけでなく乗馬までさせてもらい、この経験は研修での大切な思い出の一つになりました。

○ 印象に残ったこと

今回の研修は私にとって初留学だけでなく初海外でもあったため、初めて見て、体験をする文化に衝撃を受けることが何度もありました。まず、kiwi（ニュージーランドの人を指す）は雨が降っても傘を差さないこと。外に出た瞬間「うわ、土砂降りだ…」と思うようなひどい雨の日でも、kiwi は傘を差さずにフードだけかぶって飄々と歩いているのです。ある日自分も真似をして傘を差さずに出かけてみたのですが、次の日案の定軽い風邪を引いてしまったので自分は日本人なのだ実感しました。他にも、公共交通機関がかなり時間にルーズなことにも驚きました。Kiwi の時間の流れについていけず最初は戸惑うこともありましたが、すぐに慣れてしまいました。そして日本に帰ってから電車やバスに乗ったときに、この時間の正確さは当たり前じゃないのだ、日本の特長なのだ実感することができました。他にもまだまだありますが、これらのような日本と他国の文化の違いの発見には非常に興味が湧き、とても印象に残っています。

○ 感想

英語を学ぶ生活ができたことはもちろん、ニュージーランドに関することの発見や学び、日本に関することの再認識をしたこと、また今までやったことのないようなことに挑戦したことなど、この研修で経験したことは全て自分にとって大きなものとなりました。ここでの学びを活かしていけるよう、さらなる英語力の向上を目指して、今後意識をして生活していこうと思います。



オタゴ大学での短期留学を終えて

生活科学部 食物栄養学科

3年 齋木 美果

授業内容



オタゴ大学の語学センターにて、TOEICの対策の授業と **General English** の授業で英語を学び、オタゴ大学の栄養学の授業の聴講で、英語で学問を勉強しました。TOEIC の授業では、一般的なテキストと TOEIC に似た形式の問題集を交互に行いました。実践的な問題を解く練習ができたと思います。**General English** の授業ではテキストを進めるのと並行して、**Critical Thinking** といって画像を提

示されてそれを見て思ったことをなるべく速く長く文章にするといった瞬発的に英語をひねり出す練習や、リスニング・リーディングの向上のためのテストなど様々なことをしました。包括的に英語のスキル向上を実感できました。オタゴ大学の授業の聴講は今まで習ってきた内容を英語で学ぶことができたので、専門的な英語を学ぶことができました。そしてオタゴ大学の授業の雰囲気を経験できたことはとても刺激的でした。

課外活動

インターンがこの短期留学のひとつのプログラムとしてあり、私はカフェで働かせていただきました。カフェでの仕事はサンドイッチなどの調理でした。スタッフの方々はとても親切で仕事の内容はもちろんのこと日常生活のことなども話してくださり、非常に楽しく働くことができました。

ツアー

語学センター主催のツアーに3度参加しました。2時間程度のバスツアーと1日オタゴ半島ツアー、1泊2日のクイーンズタウンツアーです。

・バスツアー

シグナル・ヒルに行きオタゴ半島から繁華街まで見渡せる絶景を見渡したり、世界で最も急斜面としてギネスにも登録されているボルドウィン・ストリートを実際に上ったりと2時間とは思えないほど充実したツアーでした。

・オタゴ半島ツアー

ニュージーランド唯一のお城であるラーナック城を観光したり、クルーズ船に乗り半島の先端近くまで近づき、アシカやロイヤル・アルバトロスなどの野生動物を観察したり、ペンギン・プレイスでイエロー・アイド・ペンギンを間近で観察したりと自然を十分に体感できるツアーでした。

・クイーンズタウンツアー

ジェットボートで川を急速に走ったり、ルージという乗り物で遊んだり、マオリの伝統の Haka を観賞したり、湖をクルージングしてファームを見学したりとこちらのツアーはアトラクション盛りだくさんのツアーでした。

バスツアーは無料で他の2つのツアーも自分で計画して旅行するよりも格段に安い値段でいくことができました。

ニュージーランドでの生活

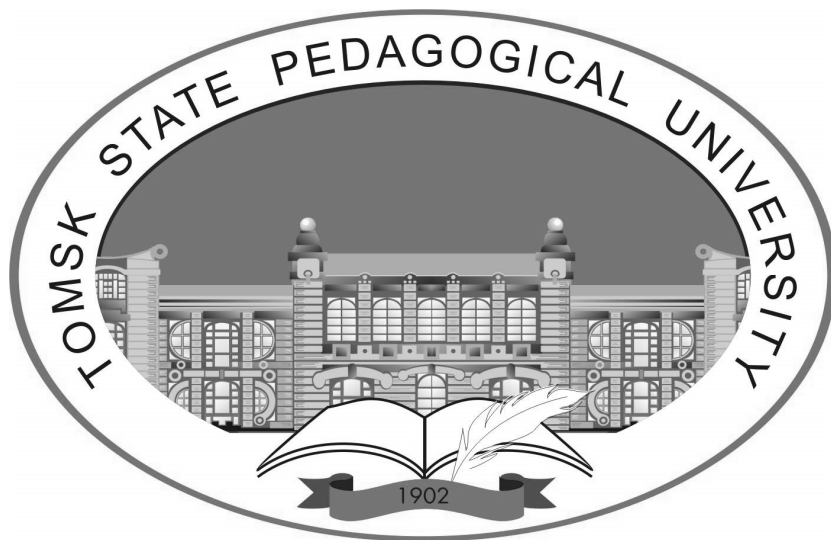


ろでした。

そしてホームステイは私にとって何よりも良い経験になったものです。まずニュージーランドの生活を体感する機会になったことや母国語が英語の人と毎日過ごすことで学校では習えないような日常的な英会話をする機会になったことはとてもためになりました。そして語学センターでの勉強に疲れて悩んだときも、ホストファミリーがあらゆる面からサポートしてくれたことで私は最後まで語学センターに通い続けることができました。また私のホームステイ先には後から中国人留学生もやってきて、はじめはうまく付き合っていけるか不安でしたが、同じ境遇の中で彼女と意見を共有し、助け合いながら信頼を築けました。その経験が私に新しい環境に適応する自信を与えてくれました。

6週間という期間は長いようでとても短く、十分に話せるようになるには全然足りなかったですが、それでも学んだことはたくさんありました。この経験を糧にしてこれからの生活で待ち受けてくる困難にも柔軟に適応していきたいです。

まず初めに驚いたことは大学キャンパスが一つの町になっていたことでした。広大なキャンパスの中には、学生のための施設がたくさんあり、また多くの車やバスが行き来していました。しかしキャンパスを出るとすぐにダニーデン一番の繁華街に行きつき、また違う方向に向かうと広大な自然が待ち受けていました。ダニーデンは町の中心地も自然も楽しめるとてもエキサイティングなところ



参加者 2 名

ロシアのトムスク国立教育大学での春季短期研修を終えて

文教育学部 言語文化英語圏言語文化コース

2年 宗像 あかり

(研修概要)

研修先はロシア連邦の西シベリアに位置するトムスク国立教育大学（以下 TPIY）であり、期間は2016年2月27日から3月19日の22日間でした。ただしその後個人的にシベリア鉄道に乗り、モスクワに滞在してから帰国しているので、実質的なロシアへの滞在期間は行きフライトで入国した日にちも含めると29日間になります。

TPIY では一日約4時間のロシア語文法の授業と約2時間のロシア文化の授業を履修しました。また、日本語学習者との交流を目的としたティーパーティーも2回開催され、ここで知り合いになったロシアの人たちに研修の最後に行うロシア語でのプレゼンテーションの準備を手伝ってもらいました。

研修期間中には、ロシア第三の都市であるノボシビルスクに小旅行をしたり、コンサートやバレエや演劇を楽しんだり、ロシアの伝統的なサウナを体験したり、春祭りに行ったり、マトリョーシカを塗ったり、ロシアの人の自宅でパーティーをしたりといった様々な体験をすることができました。



左の写真…TPIY、右の写真…大学寮

(研修を終えて)

ロシア語は留学前から2年間勉強してきました。そのためロシア語文法の授業はほとんどの内容が復習というかたちになってしまいましたが、これまでの学習内容を改めて定着させる良い機会になったと思います。また、授業内ではロシア語の発音、特にキリル文字ひとつひとつが持つ音を丁寧に練習してくれたので、発音だけではなくリスニングの面に非常に良い影響がありました。一方でロシア文化の授業は、知らないことばかりを教えてくれる内容でとても面白かったです。ロシアという国は近くにはありながらも心理的には遠い国だったのですが、これらの授業によってより身近な国であると感じられるようになり

ました。

研修の最後に行うロシア語でのプレゼンテーションでは、主題に日本文学（古事記・日本書紀・万葉集）を選択しました。ロシア語で発表するのは、アクセントや発音の問題、そして抑揚の難しさが大変でしたが、最終的には満足できる水準まで引き上げられたと思っています。発表準備を主に手伝ってくれたのは ТГПУ の Ксения さん（写真右、写真左は私）でした。彼女は日本語も英語も流暢に話すことのできる方だったのでたくさん



を相談しやすかったです。（ちなみに使用言語は 9 割が英語であり、あとの一割はロシア語と日本語でした）彼女とはティーパーティーで初めて会ったときから、文学の話をたくさんするなどして楽しい時間を過ごすことができました。帰国してからも Facebook で写真を送りあったり、近況報告をしたりしています。

研修もうじき終わりそうなある日の夜に、ひとりで演劇を観に行ったときがありました。演目は William Shakespeare の Twelfth Night であり、英米文学を専攻している身としては何としても鑑賞したい作品でした。路面電車に乗って劇場に向かい、チケット売り場で「今日の夜の Twelfth Night のチケットを一枚ください」「黒と白、どちらの席が空いていますか？」「6列7席をお願いします」「いくらですか？」「一階席の入り口はどこですか？」とロシア語で話し、それからおよそ 3 時間観劇を楽しみました。日常会話は留学前にはほとんど勉強したことがなかったので、トムスクについた当初はなかなか言葉が出てこずに焦ってばかりいたのですが、一か月弱の研修と生活でここまで話せるようになったのかと自分のことながら驚愕したことを良く覚えています。実際に使わないと生活が上手く回らないところに身を置くことは、外国語の習得に効果的であると感じました。

普段見慣れているイギリス演劇というよりもアメリカ演劇寄りの演技をする役者たちと、ほとんどがビニール袋や角材など手に入りやすそうな材料で作られられたセット、笑いに対する過剰ではないかと思ってしまうほどの演出、そして舞台が明らかに地中海と思われる土地に設定されていることなど、これまでに観たことがないタイプの作品で、今後自身が研究を進めていく際に比較の材料にするなどすると役に立つだろうと思います。また、ロシア語での上演だったため、その音を意識して観劇したのですが、ロシア語の美しさを体感することができ、これからもロシア語学習を続けていきたいとより強く感じるようになりました。

ТГПУ に留学したことによって、自身のロシア語能力が向上したことはもちろんですが、ロシアに対する認識が変化し、たくさんロシアの友達ができるなど、様々な恩恵を受けることができました。真冬のシベリアに行くのは無謀ではないだろうか、ロシアは危険な国ではないだろうかという不安も渡航前にはありましたが、思い切って実行してみて心から良かったと今は思っています。

トムスク国立教育大学での短期研修

生活科学部 人間生活学科

2年 倉島 比果梨



授業内容

3週間の研修期間中ほぼ毎日4時間弱ロシア語の授業があり、発音や文法を重点的に学習することができました。ロシア人の先生やロシア人学生に教わるネイティブの発音は難しかったですが、その分正確なロシア語を学ぶことができたと考えます。また、授業は英語を用い

て行われたため、並行して英語のスキルも身についたように思います。また毎日授業後に宿題が出されたので、放課後の時間もロシア語の学習に費やすことができました。最初はキリル文字の読み方から始まり徐々に授業のスピードが速くなっていったので、留学前にロシア語を未履修だった私でも余裕を持って取り組むことができました。単語や文法などを主に学習し、3週間という短期間でありながら充実した授業内容であったと感じます。

課外活動

授業以外にも、ロシアの伝統文化体験や日本語を学ぶロシア人学生との交流などがあり、授業時間以外や放課後もとても充実していました。文化体験ではロシア人の先生や学生が伝統料理や伝統行事を紹介してくださり、興味を持って取り組むことができました。例えばロシアの伝統的な家庭料理である борщ (ボルシチ) や Блины (ブリヌイ) を皆で食べたり、地域に伝わる伝統的な人形を実際に作る体験をしたり、ロシアで広く有名な童話を紹介してもらったりしました。また1日休日を使って大学から遠くにあるバーニャというロシア流のサウナに行ったりもしました。私はこの留学で伝統体験を最も楽しみにしていたので、すごく貴重な経験ができたと感じます。授業とは異なりとても賑やかな雰囲気での楽しい時間でした。

また授業とは別に、トムスク教育大学だけでなく他の大学や社会人で日本語を学習している方々と交流会を行いました。今回の研修の中でこの交流会が一番有意義だったと感じます。この交流会を通して沢山の同年代のロシア人の友人を作ることができ、ここで友達になったロシア人学生が街を案内してくれ、毎日の放課後がとても充実したものになりました。カフェに連れて行ってくれたり、トムスク教育大学以外にトムスク工科大学や医科大学を案内してくれたり、友達の家で пирожки (ピロシキ) を作ったりしました。日本人学生と街を散策するのも楽しいですが、ロシア人学生と色々な話ができただけがとてもおもしろかったです。みんなとても親切でフレンドリーで、彼ら無くしてはこの留学は成り立たなかったと感じます。

ロシアでの生活

この留学は広島大学の参加者と合同で行うものだったので、現地ではほぼ全ての行程で広大な学生と一緒にした。留学中に滞在したのは教育大学の寮で、大学の建物のすぐ目の前に寮があったり、近くに大きなスーパーやコンビニがあったり、通学するにも生活においてもとても便利でした。ただやはり大学の寮なので設備は満足とはいえませんが、ロシアの生活を体験できたのはとてもおもしろかったです。ロシアは日本に比べると物価が安く、大学の学食もとても安いのでお腹いっぱい食べても 200рубль (350 円ほど) もかからないほどでした。寮にはキッチンがありましたが、短期滞在であったり調理器具が使いづらかったりしたのでほぼ毎日外食でした。街にはロシア料理のレストランが沢山あり、お友達になったロシア人学生が放課後に連れて行ってくれたので、毎日何を食べようか楽しみでした。



授業は大体午前 10 時に始まり午後 3 時頃には終わったので、毎日放課後遊びに行くことができました。トラムやバスに乗って繁華街へ出て、買い物をしたり散策したりしました。交流会で仲良くなったロシア人学生が毎日寮に迎えに来てくれ、お店を案内してくれたり家に招待してくれたりしたので、ロシア語がわからなくても安心して過ごすことができました。トラムやバスは乗る線や乗り方がとても難しく、慣れていないと全然乗りこなせないもので、ロシア人学生に付き合ってもらえたのはとても助かりました。

困ったこととしては、トムスクでは学生以外本当に英語が通じませんでしたから、何をすることも相手の言うことが理解できず大変でした。街や施設には英語の表記が全く無いので、留学してすぐ日本人学生だけでレストランに行くと、ロシア語の表記が全く読めずメニューがわからなくて苦労しましたし、駅で鉄道のチケットを買いたくても駅員さんの言うことがわからなくてとても困りました。しかしそのおかげで、その場で辞書を引いたり Google 翻訳を使ったり、言葉がわからなくてもボディランゲージを使ってなんとかして伝える術が身についたように思います。

この留学に参加するまで私がロシアという国やロシア人に対して抱いていたステレオタイプは、この留学を通して全くの偏見であったと感じました。ロシア人は一見無表情で無愛想ですが、実際はとても親切でフレンドリーで、困っていると知らない人でも必ず手を差し伸べてくれました。加えて日本に関心を持ち日本語を学ぶ学生と仲良くなることで草の根の交流ができたことはとても貴重な経験であったように感じます。同年代のロシア人学生と日露間の国家的な諸問題について正直な意見を交わすことができたのも貴重な時間でした。この研修で得られた経験を糧に今後活かしていきたいと思います。



参加者 2 名

NTU Spring+1 に参加して

文教育学部 言語文化学科日本語・日本文学コース

2年 前田 佳菜絵

《プログラム概要》 私は国立台湾大学主催の「2016 NTU Spring+1 Chinese Language & Culture Program」に参加し、2月29日から3月21日までの3週間で台北で過ごしました。このプログラムは平日の午前中に中国語の授業を、週3回ほど午後に台湾文化か台湾の博物館についての授業をやり、中国語と台湾文化の授業は中国語で、博物館についての授業は英語で行われました。授業の入っていない午後や土曜日は「Trip」があり台北付近の有名な観光地を訪れました。私を含めた日本各地の大学生・大学院生総勢21人が参加しており、うち私を入れた19人は台湾師範大学のゲストハウスで一緒に生活しました。

《授業内容》 3月1日に面談が行われ、それによって午前中の中国語の授業のクラス分けがされました。初心者・少し話せる人・日常会話ができる人・現地人並みに話せる人の4クラスに分かれ、私は少し話せる人のクラスでした。1クラス5人前後で、先生は台湾大学の大学院生が務めていました。大学院生ということもあり年齢も近く、少人数クラスということもあり、とても気軽に話せる存在でした。私のクラスの授業は英語と中国語で構成された教科書で簡単に文法を確認し、リスニング・スピーキングスキルの向上を狙ったものでした。特に役立った授業内容は道案内の会話で、実際にタクシーに乗ったときに運転手に道や行先をちゃんと伝えることが出来るようになりました。

午後の台湾文化の授業は21人全員で受講し、それぞれの中国語のスキルを窺い知ることが出来、良い刺激を受けました。博物館紹介の授業の先生はとても英語が流暢で、また、積極的にコミュニケーションを取って下さり、英語のリスニング・スピーキングスキルの向上も出来たと思います。(写真は中国語の授業の先生と同じクラスの人との集合写真)



《課外活動》 「Trip」では様々なところに行きました。故宮博物院は博物館紹介の授業で博物院の歴史や見どころの説明を受けた次の日に行きました。生憎有名な翠玉白菜は他の展覧会に貸出中で見る事が出来ませんでした。複雑な歴史の中でも保存され続けた展示品の数々は非常に興味をそそられるものばかりで、数時間だけで全部を十分に見ることが難しいくらいでした。『千と千尋の神隠し』の舞台のモチーフになったのではないかとということでも有名な九份も観光しました。その日は雨が酷く霧も発生していましたが台湾のお茶を堪能するなどゆったりと風景や街並みを堪能しました。ゴンドラで有名な猫空にも行き、そこから見えた台北の夜景は本当に綺麗でした。他にも宜蘭や中華民国総統府などに行きました。

課外活動中はいつも台湾大学の学生 **Student Adviser** が同行してくれました。彼らは選考を通過した選ばれし学生ということもあって英語を流暢に話せ、中には日本語も話せる学生もいました。彼らの知的好奇心の強さは私にとって非常に新鮮で、日本語・英語・中国語の3カ国語を用いた彼らとの会話は楽しくかつ有意義な体験だったと思います。

《台北での生活》 まず台北は日本と似ているというよりは日本を内包しているという言い方が正しいかもしれません。各所で日本語の表示が見られたり日本製品が売られたりしていました。天候も想像よりは肌寒くやはりまだこちらでも冬といった感じで、冬用のコートを持って来なかったことを後悔しました。

物価は日本よりも安く、勿論交通費も安く、タクシー・自転車（私は乗りませんでしたが多くの人が常用しています、公共の自転車貸出サービスがあります）・地下鉄は頻繁に使いました。食べ物は基本的にどれも美味しかったです。台湾はアジアの文化の中継地というのが私の所感で、様々なアジア料理店が巷に溢れていました。朝ご飯はゲストハウスから支給された食券を使って近くのハンバーガー屋さんかカフェで済ませましたが、昼食や晩ご飯は台湾大学の近くや宿泊先の師範大学の近くで摂りました。台湾で安くご飯を食べるなら何より行くべきなのは「夜市」でしょう。台湾料理が300円行くか行かないかぐらいの値段で売られています。私は晩ご飯をよく「師大夜市」で食べました。

ゲストハウスでの生活はホテルとほぼ同じものだと思ってもらって構いません。毎日ルームメイキングがあり、バスタオルなどの日用品も毎日交換されました。カルチャーショックだったことの一つに台湾ではトイレトペーパーを備えつけのゴミ箱に捨てるということがありましたが、ルームメイキングのおかげでその点に関する抵抗感は払拭され、快適かつ清潔な生活を送ることが出来ました。むしろ私はそのような慣習があるからこそ台湾のトイレはよく掃除がされている印象がありました。

一緒に暮らした日本の大学生との交流も大事な思い出です。3週間一緒に宿題をしたりご飯を食べに行ったり観光をしに行ったりするなど、充実した生活を送れたのは彼らの存在が大きいです。台湾の人だけでなく日本各地の大学生とも交流を持てるのもこのプログラムの魅力だと私は思います。

台湾は前述の通り様々なアジア文化と遭遇できる場所です。私がこのプログラムを選んだ理由の1つに日本の文化を客観的に見る視点を培うためというものがあります。私はこのプログラムを通して台湾を体験し日本と比較した際に、日本という島国が自分たちの文化を強く持っている印象を受けました。それは日本人が日本を愛している、信じているとも言えますし、他の文化（商業的なものも含めて）に対してやや排斥的などころがあるとも言えるでしょう。たとえば台湾人は日本のアニメや芸能人をよく知っている人が多い一方で、日本人のうちどれぐらいの人が台湾の有名人を知っているのかと自問してみたときにそのことが明らかだと思います。あくまで現時点では個人的な所感に過ぎませんが、それでも私の中で確実な比較対象が出来、そしてそれに対する興味が湧いたという点で、今回の台湾留学は有意義なものであったと私は考えます。

国立台湾大学での春期短期留学を終えて

文教育学部 人文科学科

1年 中谷 莉奈

私が中国語を学んだのは1年間だけでしたが、3年次に台湾か中国で長期留学をしたいと考えていたのでこのプログラムに参加しました。

授業内容

最初に口頭試験を受けて、レベルに応じた4つのクラスに分けられました。初級クラスは発音や単語を中心に、上級クラスになると中国語の論文や映画を教材にするなど、それぞれのレベルに合った授業がされていたと思います。先生は全員とても明るく、話しかけやすい方々ばかりでした（写真の左から3番目の方が先生です）。

授業は中国語で行われました。最初はついていけずに戸惑いましたが、先生がやさしい中国語でおっしゃってくれたり、どうしても私たちが理解できないときには英語を使用して



くださったりしたので、とくに困るようなことはありませんでした。また、テキストや黒板の字は繁体字が使用されていましたが、私たちが中国語で作文を書くようなときには簡体字を使用してもよいことになっていました。授業では主に文法を扱いました。しかし、教師から学生への一方的な授業ではなく、習った文法を用いて一人ずつ先生と会話することが多かったのでリスニングやスピーキングの

能力がかなり鍛えられたように感じます。

予習・復習はもちろんのこと、課題は毎回出されました。私たちのクラスで頻繁に出された課題はテキストの音読、250字の作文です。慣れないうちは1つの課題に2～3時間かかることもあったので、夜に出かけられないときもありました。ゲストハウスに小さな会議室があり、勉強はそこに集まってすることが多かったです。わからないことがあればそこで気軽に他の人に聞くことができたので、課題がつらいと思うことはありませんでした。

台湾での生活

私たちのほとんどが、台湾大学から歩いて30分ほどの台湾師範大学のゲストハウスに滞在しました。私が住んだ二人部屋はとても広くきれいな部屋でした。台湾のテレビ番組には字幕が付いているので、リスニングの勉強にもなりました。日本のテレビ番組やアニメなども中国語の吹き替えで放送されていて楽しめました。

台湾での食事は満足できるものでした。朝はホテルの近くのカフェ、昼は大学近くの店で、夜はゲストハウスの近くの夜市や店で食べるが多かったです。これらの店の食事は1食100～300円程度で食べることができました。しかし、台湾の食事はどうしても炭水化物や肉類に偏りがちになると思いました。「素食」と書かれた料理は野菜中心の料理だったので、野菜が食べたくなったら探しました。また、留学は3月だったので期待していたほど果物が食べられず残念でした。



台湾の交通はとても便利です。新幹線や、MRT と呼ばれる地下鉄は日本の電車よりかなり安い値段で乗れます。しかし、ホームや電車内での飲食は固く禁止されており、罰金を科されることもあります。私はそのことを知らずに電車内で飲み物を飲もうとしたため、留学前にそうした情報は調べておく必要があると感じました。

留学を通して考えたこと

まず、東アジアの歴史や現在の国際状況などをもっと知らなければならぬと考えました。私たちは中国語の授業のほかに台湾の歴史や文化を学ぶ授業もありました。そうした話題にはどうしても日本の台湾植民地化に触れざるを得ず、先生方や台湾大学の学生が慎重に言葉を選んでいるように感じられました。また、上級クラスでは台湾と中国との現在の関係や歴史認識などにも触れていたようでした。私たちと同じ年代の台湾大学の **Student Adviser**の方が卒業後徴兵されると聞いて、平和なように感じられる台湾でも戦争の脅威に備えているのだなと感じました。

次に、他言語を学ぶことの必要性を改めて実感しました。振り返ってみると、私が英語や中国語を勉強したのは試験や入試のためであり、日本語以外の言語を使ってコミュニケーションをとるという場面はほとんどありませんでした。しかし、日本語が通じない国へ行くことで、日本語以外の言語をもっと学ばなければならぬと強く考えました。留学中、私は台湾人に台湾の生活やジェンダーについてたくさん聞きたいことがありましたが、私のつたない英語や中国語では尋ねることすらできないことが多々あり、何度も悔しい思いをしました。次の機会のために、しっかり勉強しようと思います。

研修参加者からの Advice&研修先での Tips

※ここでは、各研修先に関する情報や、留学に対するアドバイスが見られます。

※実際の声を伝えるため、みなさまの原文のまま載せています。



University of Hull (イギリス)

1. 出発前について

・イギリスに関する本をいくつか読んだが、それはのちに現地の人々と話す際や、イギリスの文化を学ぶ授業の際に大変役立った。歴史や文化など基礎知識は把握しておいたほうが良い。

・春休みの課題等は先に終わらせておく。ハル大学での課題や観光で、日本から持ってきた課題をする時間はほとんどない。

・もっと前回の参加者に体験談を聞いておくべきだったと思った。イメージがわからない、聞きすぎるとわくわくしない、など思っていてあまり聞かなかったのですが、聞いておいて損はないと感じた。

2. 授業について

・日本での受け身の授業とはまったく違うので、自分の意見を積極的に言うことが求められる。初めはなかなか難しいが、間違えても怒られることは決してないので、積極的に参加すべきだと思う。常に考えながら授業に臨み、思ったことは、とりあえず口に出して言ってみた方が良いと思う。そうすれば、自分の speaking により自信も持てるようになるし、間違えてもそこから沢山のことを学べる。

・先生方がはっきり話してくださるのでわかりやすいと思います。ただ、自分から積極的に動いて発言しないとかなにもしないで終わるので、受け身にならずどんどん発言してください。間違えても誰も笑ったり怒ったりしません。

・配布資料が多いのでファイルを複数個持っていくなどした方がいいかもしれません。

・英語の授業の他にも、Hull 大学の正規の授業を受けられます。正規の授業の先生は英語の先生とは違って、とても早口なので聞き取りにくいです。私は、同じ授業を受けている学生の中で友達を作って、その授業のことについて授業後にカフェなどに行っている聞いて、授業を理解するようにしていました。

・サウジアラビア人や中国人など、現地で英語を学んでいるアジア系の学生とともに学んだ。日本人との大きな違いは、授業に対する積極性とスピーキング力の高さだ。先生の投げかける質問に真っ先に答えたり、自分の意見を主張したりしようとする姿勢に最初は戸惑うかもしれない。しかし、せっかく英語を外国の方と学べる機会なのだから、思いついたことは声に出してみる方が良い。先生方は優しいので、どんな意見であっても聞き取ろうとしてくださる。

3. 寮での生活について

- ・最初は電気が見つからない、暖房が入らない、ネットが使えない、鍵が使えない、など不具合が多く生じていた。あまりのトラブルの多さに驚くかもしれないが、これも一つの良い経験となる。不具合があるときは、寮長に連絡を取るなど自分から動かなければならない。
- ・寮にトイレットペーパーがないので1ロールほど持って行った方がいい。また箱ティッシュは意外と使える。
- ・寮のフラットメイトが騒がしい可能性があるため、耳栓があると夜寝るときに役立つ。
- ・シャワーの水勢は弱く、ごくたまに暖かいのが出ないこともあります。お風呂に入らなくても大丈夫なように身体拭きシートは持参しておいた方がいいと思います。
- ・ランドリーには洗濯機と乾燥機があり、それぞれ課金する大きいものとそうでないものがあります。下着類は持参していた石鹸を使って部屋で手洗いをしました。
- ・洗濯を干す場所がないため、部屋に干せるよう洗濯ひもと洗濯バサミを持って行くとよい。
- ・無線LANがなく、有線LANなので、LANケーブルを買っておくとよい。
- ・暖房は完備されているが、集中管理のためつけたい時につかなかったり、時々壊れたりするため、暖かめの寝間着などをもっていくと良いと思う。

4. 食事について

- ・基本的に朝は自炊して、お昼の分も作る。夜は外食か自炊をする。同じ階の人同士でお金を集めて食費用財布を作ると便利。またお好み焼きの素や海苔巻き用の海苔を持ってくると、現地の人を交えて日本料理を振舞ってパーティーすることができるのでおすすめ。
- ・日本食を持っていくなら、かつお節や本だしなどの和風だしがおすすめ。醤油やみりんは向こうでも買える。
- ・キッチンには、IH、オーブン、トースター、電子レンジ、冷蔵庫があるのでわりとなんでもできます。
- ・昼食は、私は大学内の生協のような店で毎日ラップやパスタなどを買っていましたが、多くの友達は朝、サンドウィッチなどを作って持って行っていました。
- ・水筒と、サンドイッチが入るサイズの弁当箱は学校に持っていくのにとても便利。
- ・乾燥味噌汁や、サトウのご飯などの日本食を持っていくと、気分転換になって良いし、簡単に作れるので便利である。
- ・スーパーマーケットは、寮の周りにたくさんあるため、学校帰りなどいつでも寄ることができるが、現地の店はどこも夕方頃には閉まってしまうため注意が必要だ。また、現地のスーパーの商品は量が多いため、パンやパスタなどは同じ階の人と情報を共有しあってシェアした方がよい。
- ・菜箸、おたま、フライ返し、ピーラーなど料理器具を持って行った方がよい。

5. 現地の学生・地域の方々との交流について

- ・とても親切でフレンドリーなので話すときに構える必要は無い。日本に興味を持っている人からはいろんな日本に関する質問がくるので準備しておいた方がいい。(アニメの話からビジネスの上下関係まで幅広く聞かれた)
- ・日本からのお土産を10人分ほど用意しておく、仲良くなるきっかけになるかもしれません。
- ・Japanese Society という、Hull 大学の日本語サークルがあり、そのメンバーがたくさんおもてなししてくれます。カラオケや飲み会、遊園地で遊ぶことなどを企画してくれたりするので、メンバーとはとても仲良くなれます。
- ・週末は、日本人の学生ではなく、現地の学生を積極的に誘って外に出かけると、彼らとの交流も深まり、楽しみながら英語を勉強できると思う。
- ・Tandem Partner と呼ばれるパートナーが1人につき4～5人割り振られる。パートナーのほとんどは日本語の授業を取っているため、お互いに自分の言語を教えあうことを目的としている。なるべく早く積極的に連絡を取って気の合う人を見つけ、お茶をしたり映画を観に行ったり、時には自分の課題を添削してもらったりすることもできる。それぞれの方法で交流を深めていけると良い。

6. お金について

- ・クレジットカードがどこでも使えるので、VISA カードを作っておくと便利。
- ・食事代の割り勘や、ネットで予約した宿の料金の建て替えなど、現金が必要になる場面が多いのである程度は常備しておくといい。
- ・寮一大学間のバスが週チケットで各 10.5£。現金しか使用できない。
- ・ロンドンやその他の観光地は特に高いです。レストランで食事をするといつの間にか 10ポンド超えはしてしまいます。
- ・カードと現金の使い分けをしてください。個人的な買い物はカードでいいのですが、みんなまで買って割り勘をする時などには現金が必要になりました。

7. その他

- ・レンタルの携帯電話の番号はお茶大生同士でも交換しておく、万一のときに役に立つ。
- ・体調管理には気をつけた方が良く、イギリスの風邪は咳がひどく、とても長引く。
- ・週末の旅行は、プランだけ考えておいてチケットの購入などは向こうに着いてからの方がよいかも。現地の学生が遊びに誘ってくれるので、それを考えつつ計画を練ると良い。

Monash College (オーストラリア)

1. 出発前について

- ・出発2週間ほど前に、ホストの情報の連絡があり、ホストファミリーとメールでやりとりすることができました。メールで家のルールやネット環境を確認しておくとも良いかもしれません。
- ・出国直前にも向こうの学校からクラス分けや授業内容などのファイルが送られてくるため、しっかり確認すること。



2. 授業について

- ・最初の1週目は大阪大学との合同プログラムでした。英語は比較的易しかったです。メルボルンでの生活に慣れるための英会話演習でした。2週目からは、日本全国から集まった学生とのプログラムで、20名ほどのクラスで英語の授業がありました。授業では、プレゼンテーション、ディスカッションをする時間が多くありました。他には、前日のことや週末の予定などを話すフリートークの時間や、プレゼンテーションに向けて現地学生へのインタビューなども行いました。
- ・授業自体はそれほど難しくないが、教師が全体に対して質問を投げかけたりした場合は、積極的に発言したほうが、より深く授業に参加することができる。グループ活動の場合も人に仕事を任せるよりも、自分から進んで行ったほうが楽しめる。
- ・教室は寒いので必ず長袖の羽織るものを。

3. ホームステイについて

- ・私のホームステイ先は、女性が一人と犬が一匹の家庭でした。一緒にショッピングセンターへ出かけたり、休日にはビーチに連れて行ってもらい、BBQ もやっていただきました。水不足のためシャワーを浴びるのは短めにということは注意しておいたほうが良いと思います。週末の予定など、重要なことは何度か確認することをお勧めします。
- ・ホストファミリーとは、笑顔と日々の挨拶、そしてコミュニケーションを忘れないこと。相手の言っていることを理解できるまで、そして自分の言いたいことを理解してもらえらるまで意思疎通を図ること。無駄な遠慮は無用。自分の意思を伝えましょう！異文化を楽しむくらいの心意気が大事。インターネットは基本どの家庭にもありますが、Wifi が有料の家庭もあるので、最初に必ず確認しておくこと。
- ・ホストファミリーに日本料理などを振舞ってあげると喜ばれます。
- ・宿題もそれほどないので、家にいるときは自室にこもるよりも、自分から家族の輪に入り込むようにし、できるだけ長時間一緒にいたほうが楽しい。
- ・自分の予定がないときに、ホストファミリーがどこかに誘ってくれる場合はできるだけ誘いに乗ったほうが良い。
- ・遅くなる場合は早めに知らせ、どうやって帰るかも伝えると良い。

- ・家によって違うのですが、私のところでは洗濯は週に一回でした。現地の洗濯機は、洗濯後服の生地が悪くなります。

4. 食事について

- ・様々の国からの移民が多いオーストラリアでは、世界各地の料理を楽しむことができました。シティの中心には中華街があったり、少し離れた場所にはイタリア街があったりなど、食事からも多文化共生社会を感じることができました。
- ・メルボルンの食べ物は基本的にどれも美味しい。ホストファミリーの家での食事の場合、食べ物の量や味・辛さなど自分に合わない場合はなるべく早めに伝えること。レストランなどで食べる場合、少し日本より物価は高い。
- ・食べなさいと言われたときに、本当に満腹のときは、はっきり食べられないと伝える。
- ・契約上、三食出してくださることになっているため、夕食や昼食が要らない日はできるだけ1日前にホストマザーに伝えたほうが良い。
- ・水は価格が高いため、ペットボトルやタンブラーを持参し、水道水を利用すると節約になる。

5. 現地の学生・地域の方々との交流について

- ・モナシュ大学には日本語クラブというものがあります。クラブで仲良くなった学生にメルボルンを案内してもらったり、文化交流をすることはとても楽しかったです。仲の良い友達もできたので、またメルボルンを訪れたいと思っています。
- ・日本語クラブをはじめとして、他のクラブも参加できる活動を行っているため、調べるか、友達に聞いて積極的に参加し、地域の学生との交流を深めたほうが良い。

6. お金について

- ・オーストラリアは物価がそこまで高くないので、外食を控えればお金に困ることはないと思います。
- ・日本にいるうちに、キャッシュカードを作っておくと安心。

7. その他

- ・服装は、基本的には夏・秋用のもので十分。その他、パーカーや長ズボンがあるとよい。
- ・バスの運転は割と粗めなため、乗り物酔いをしやすい人は前もって、酔い止めを多めに持って行くと良い。
- ・交通の便が不便ということをお心得おきましょう。バスは1時間に1本で、終バスも9時台で終わりです。電車はたくさん通っていて便利なのですが、私の家からシティに行くには最寄りの駅までバスで行かなければならなかったため、帰宅時はバスの時間を考えて電車にのらないといけませんでした。

1. 出発前について

- ・ホームステイ先と連絡をとり、何が必要か尋ねたりしました。特にドライヤーがない家だったので先に尋ねたことは正解だったと思いました。
- ・以前に UNSW のプログラムに参加した友人や先輩から情報を仕入れるのが良い。
- ・渡航前には、ホストファミリーと連絡をとって、挨拶する。洗濯の頻度と、タオルを借りられるか確認。わたしの友人は、タオルが借りられず、現地でやむなく購入していた。



2. 授業について

- ・私たちのクラスはスピーキングメインでした。週末なにをしたかという簡単なレベルから始まりました。クラスでも5グループに分かれ、話し合いをし、他のグループにもグループ内で出た意見をシェアするという形のスピーキングが多かったです。クラスは英語圏以外の中国人やスペイン人、オマール人、韓国人など様々な国の人で構成されており、英語圏以外の国同士の会話のキャッチボールの難しさに気付きました。
- ・受け身で受けるのではなく、なるべく積極的に発言ができるといいと思う。先生方も熱心に指導してくださるので、わからないところもどんどん質問すると思う。
- ・クラスに日本人が多かったので、学校では日本人とも英語で話すようにしていた。積極的に発言しないと、主体的に授業に参加できない。放課後、他のクラスの留学生や、知り合った現地の友人と遊ぶと英語を使う環境が増えてなお良い。覚えた単語を、その日のうちに使うようにしていた。
- ・私は自分の英語力を気にしすぎたあまりいつも一言二言しか話せず、シャイだねといわれつづけました。今思うと、英語力がないのはいつそのこと開き直って、思いのまま話していたらもっともっと英語力が上がっていたのになあ、と思います。だから人の目を気にせず、思いのまま英語を話してみることを強く勧めます。
- ・クラスの半分以上が日本人で占められてしまうのが現状です。つい日本語を話してしまいがちになるので、外国の方を交えて話す・日本人同士でも英語で話す時間を作るなどの工夫が求められると感じました。

3. ホームステイについて

- ・洗濯は週に1回。晩ご飯の時間がある程度決められている。ご飯がいらなければ何時に帰ってもよい。1週間あたり10ドルを払えばWi-Fiが使える(ない家庭もあり)。
- ・私のホームステイにはホストファザーとマザーがいました。ホストマザーがいろいろと私の生活をサポートしてくれました。WIFIは一週間15ドルで使用できるようですが家の近くに無料WIFIが使えるモールがあり、学校でも使えるので、私は家ではWIFIを使用しませんでした。週に1、2回洗濯するか自分で洗うこともでき、衣類をたくさん持ってい

く必要はなかったです。シャンプー、リンスはなかったので購入しました。シャンプーやリンスは日本製のものもあり安心して使えました。

- ・なるべくコミュニケーションを取ろうとするのが大切だと思う。もし何かあれば、些細なことでもためらわずに相談するのも大事だと思う。

- ・バスルームは10分までで、シャンプー等は現地のスーパーで買いました。

- ・私の他に中国人の留学生も数人いて会話もできました。

- ・事前の情報とは違うことがあるかもしれません。私の家ではペットはいないとなっていました、実際には犬が一匹いました。

- ・ホームステイはその家それぞれ・最初にいろいろな家のルールを確認しておくが良い。

ホストファミリーと会話したり、一緒に出かけたりする時間も大切に。

- ・私は70代のおばあさんの家にステイさせてもらいました。彼女はとても優しく、いつも私のことを気にかけてくれました。ただご年配ということもあって、一緒にどこかに出かける、ということはあまりさせてもらえませんでした。もう少しマザーに積極的に交流して仲を深められれば良かったと思います。

- ・ホストファミリーによっては自分と家族のライフスタイルが噛み合わずにあまりコミュニケーションが取れないこともあります。期待しすぎない方が良いかもしれません。でも、会った時にはきちんと気にかけてくれるので心配する必要はないと思います。

4. 食事について

- ・オーストラリアの食事はおいしいし、多国籍国家なので、日本食や他の国のレストランもたくさんある。

- ・時々、日本食が恋しくなったので日本米や味噌汁をもっていってもいいと思いました。

- ・朝は、ステイ先でシリアルかトーストを選んで食べていました。お昼は持参するか、友達とランチしに行くかです。

- ・ホストファミリーには事前に食べられないものや、アレルギーのものは知らせておく。お昼をすべて外食にするとお金がかなり飛んでいくので、自分に関してはスーパーでマフィンやクッキーや果物を買って、持って行っていた。

- ・大学内で食事を取る、という時は非常に値段が高かったため、お金がすぐに飛び、焦りを感じました。私はいつも学食を利用していたため、結構食費を使ったのですが、友達はパンを持ってきたり、マザーにもらったサンドイッチを持ってきて食費を抑えるなど工夫しており、よい方法だなと思いました。

- ・日本とは味付けが異なるので苦手なものは先に伝えておく方が後々のためだと思います。気を遣い過ぎる必要はありません。食べる量についても同じことが言えるのではないのでしょうか。

5. 現地の学生・地域の方々との交流について

- ・NSA(日本語サークル)の人たちが週1くらいでイベントを実施してくれる。
- ・大学は留学生が学ぶための棟が別であったので、現地の学生との交流はそこまでありませんでした。しかし、NSAという団体にはいると比較的交流できるかと思います。
- ・出かけた先で買い物の際に、お店の方がどこから来たの?などと話しかけてくれることがよくありました。
- ・サーフィンスクールのインターンで多くの人と話すことができたと思う。これも自分次第だと思うので、積極的な姿勢が大切。
- ・クラスに留学生が少なかったので、友人の紹介で他のクラスの留学生と知り合った。なるべく日本人だけで遊ぶことは控えるようにしていた。バスやバーやカフェでたまたま知り合う現地の方と、積極的に話すようにしていた。
- ・オーストラリアは知らない人とでも気さくに話す文化なので、バスで隣に座った人に突然話掛けられるといったこともしばしばあります。夜は気をつけた方がいいですが、知らない人だからといって必要以上に身構えることはせず、気軽に話してみるといいと思います。

6. お金について

- ・現金とカードを併用するのがいいと思う。私は現金と学校で紹介されたキャッシュカードを用意したが、身分証明書にもなるのでクレジットカードがあっても便利だと思った。
- ・シドニーは本当に物価が高いです。お昼ご飯は、事前にスーパーで買ったものなどを持参したり、飲み物は水筒に水道水を入れて持ち歩いたりして節約していました。
- ・物価が高いので、なるべく必要なものを必要なだけ買うようにしていた。ただ現地の食べ物や、コーヒー文化に触れるために食べたいと思ったものには投資していた。
- ・お金は十分すぎるくらい持って行ったほうがよいと思います。私は当初予定していた金額の2倍を使いました。

7. その他

- ・交通機関を毎日必ず使うはずなので opal card がお得。コンビニで買える。
- ・蚊などの虫がでるので、虫除けスプレーやムヒを持参してもよいと思いました。
- ・日本にしかないようなもの(ポケットティッシュ)は必要であれば持っていくと良い。また、個人的に自撮り棒は会話のための手段にもなったし、思い出を残すという面からも持っていくといいのではないかと思います。
- ・とにかく楽しむことが大切だと思う。大変なこと、辛いことがあるかもしれないけれど、こんな経験はなかなかできないと思って頑張った。せっかくホームステイをするのだから、ホストファミリーとの交流を大切にしてほしい。



University of Otago (ニュージーランド)

1. 出発前について

- ・できるだけホストマザーと連絡を取っておくべき。特に何のために留学をするのか、何をしたいのかなどを書いておくと手助けをしてもらえることもある。
- ・洗濯機の使用頻度を聞いておくと持っていく洋服の量を定める目安になる。
- ・春休みの課題は必ず留学前に全て終わらせるようにしましょう。
- ・持ち物に関して、必要なものと不必要なものがわからない場合はホストファミリーに直接尋ねてしまうのが早いです。
- ・話題作りのために日本らしいお土産を用意するのが良いと思います。そしてその説明もできるようにすることができればベストだと思います。

2. 授業について

- ・毎朝 9 時から午後 2～3 時まで授業がありました。日本の学期休み期間は大量の日本人が語学学校にやってくるので日本人を見かけない授業はありません。通常のクラスはとにかくしゃべることに重きがおかれます。大変でしたが有意義でした。クラスのメンバーもみな英語力アップのために頑張っており、ちゃんとつたない英語でも聞いてくれ怖いということはありませんでした。
- ・最初のテストはとにかく頑張るべし。それによってクラスが決まる。学校には日本人も沢山いるため、完全に英語で授業が受けたいなら一番上のクラスに配属される必要がある。
- ・テキストで文法のおさらいをしたり、絵や動画を見てそれについてグループで話し合いをしたりしました。クラスには、日本人だけではなくタイ人や中国人など他国から英語を学びにきた学生がいて、流暢に英語を喋り、授業中積極的に発言をする彼らと一緒に授業を受けるのはかなり刺激になりました。授業中はあまり考えすぎずに伝えることを意識して、積極的に参加していけば得られるものも多くなると思います。

3. ホームステイについて

- ・多くの家がイヌやネコを飼っている。ほとんどすべての家で Wi-Fi は使えた。
- ・ホストファミリーはシャンプー類を使わせてくれないことがほとんどです。なのでシャンプー類を持っていくか、現地で買うかしなければならぬと思います。あとドライヤーを持っていないホストファミリーもあります。家によってちがうのですがあまり洗濯をしてくれないので 1 週間分ほどの洋服を持っていくとよいと思います。
- ・ホームステイは快適そのものでした。私は子供のいる家庭がなんとなくいやだったのでそう希望をしたところ、ホストマザー一人の家に行くことになりました。はじめはびっくりでしたが誰にも煩わされることなく自分の時間をゆったりと確保でき最高でした。
- ・ビジネスという印象が強い。また、一家にもう一人別の留学生がいる可能性があるの
で、国籍の把握、更にはその文化について少しでも知識を身に付けておくとよい。

・ホームステイ先にはホストファミリーの他にも韓国人と中国人の交換留学生が暮らしていて、バスルームは彼女達と共用でした。私は今回が初留学で初ホームステイだったため、はじめわからないことだらけであまりにも質問が多すぎてホストファミリーに聞くのを躊躇ったりもしましたが、生活に早く慣れるためにも質問はたくさんしていった方がいいと思います。またそれがコミュニケーションの機会にもなるので、英語で話すことの練習にもつながります。

・水道代が高いので、シャワーは10～15分で済ませるように語学センターのスタッフさんから教わりました。

4. 食事について

・朝晩はホストファミリーが用意してくれるが、昼は基本的には近くのお店で食べるか持参するか。ほとんどすべての料理が美味しかった。日本食が食べなくなったら、日本食レストランで寿司やうどんなどを食べることもできるし、スーパーマーケットで日本食の材料を買うこともできた。

・前もってメールでホストファミリーに苦手な食べ物などを伝えておくべき。また、ニュージーランドの外出はとても高価。

・朝食は基本自分でトーストを焼いたりバナナを食べたりして済ませ、昼は語学学校横のカフェで食べて、夕食はホストファミリーが用意してくれていたものをいただいていた。町には日本食レストランがたくさんあり、モールなどでも普通におにぎりが売られていたので特に困ることはありませんでした。キッチンを使わせてもらえる場合は、自分で日本の料理を作ってしまうのもいいかもしれません。せっかく作るのであれば、日本の文化紹介としてホストファミリーに振る舞うのもいいと思います。

5. 現地の学生・地域の方々との交流について

・インターンシップ先の人と交流ができる。オタゴ大学のボランティアの学生と話ができるイベントもあった。

・現地の学生と交流することはそこまで多くありませんでした。ですが英語を学びに来ている日本人以外の学生との交流は非常に有意義だと思います。

・語学学校の方で、現地の学生とお話出来る会を企画してくれていたり、現地の学生と交流したいと思っている学生と海外に興味のある現地の学生をマッチングしてくれるシステムがあったりして交流の機会はたくさんあると思うので、気になったら積極的に参加を試してみるといいと思います。語学学校が企画するツアーではその土地の文化を知ることができ、地域の方々とお話しする機会もあります。

・ニュージーランドの方はフレンドリーな方が比較的多いと感じます。何か困ったりわからないことがあったら、周りにいる方に聞くことも一つの手段になります。

6. お金について

・現金が必須なのは土曜朝のファーマーズマーケットくらい。ただし、バスカードのチャージやランゲージセンター主催のツアーなどはカードだと余計に払わなければならなかった。そのため、ある程度現金を持っていくことをお勧めする。銀行で日本円を換金したり、ATMでニュージーランドドルを引き出したりすることが出来る。

・物価は高いです。ペットボトルなどすべてが大きい代わりに高いです。水筒持参は賢いかもかもしれません。お昼もカフェで買わずに作るほうが賢いです。

・10万円分両替して、バス代は歩くことで節約、昼食はカフェなどを利用せず、家で用意することで節約して、2万円分ほど余った。

・語学学校企画の数万で参加できる観光ツアー、6千円のファッションショー、1万円のバンジージャンプなど、留学中に参加できる面白いイベントはたくさんあります。どのくらいお小遣いとしてのお金を用意すればいいかは人それぞれだとは思いますが、ツアーやイベントなどにたくさん参加したいと思っている人は余裕のある金額を準備した方がいいです。

7. その他

・大量の日本人が来ていて、初めは日本人とはつるみたくないと思っていたのですがこっちが英語で話しかければむこうも英語で返してくれます。そして日本人の学生との新たな出会いは非常にいいものだったと強く思います。たくさんの素敵な友達ができました。

・様々な気温に対応できる服を持っていくべき。秋冬用のコートも1着あるといい。日本らしいもの（折り紙、千代紙、日本のお菓子など）を持っていくと良い。

・ニュージーランドには坂が非常に多いため、靴は歩きやすいものを選んで持つべき。

・室内で履く用のスリッパを持っていくと、とても便利です。

・天気が変わりやすいので常時折り畳み傘を持っていくことをお勧めします。

・お酒をレストランなどで飲みたいときは必ずパスポートの原本を持っていきましょう。

・日差しが強いのでサングラスがあると良いです。

1. 出発前について

・必ず用意しておくべきものは、暖かいコート（丈が長いと良い）、暖かいブーツ（必ず防水のもので、ふくらはぎのあたりまであるものでないと雪が入り込むことがあります。内側がもこもこであるとより暖かい）、帽子、手袋、マフラーです。これさえあればひとまず寒さは乗り切ることができます。

・現地の気温をよく調べていった方がいいです。私たちの行った年は暖冬だったらしく比較的暖かかったですが、前年はとても寒く-20°Cの日もあったようです。可能なら寒暖に合わせてコートとブーツを変えられるように持っていけるといいかもしれません。また建物の中は暖かいので、一日外にいる日以外はホッカイロとかはいらないと思います。ロシア人は意外と普通の格好しています。

2. 授業について

・ロシア語文法の授業とロシア文化の授業があります。ロシア語文法の授業は基本的に英語で、ロシア文化の授業はほとんどがロシア語で、ときおり英語を混ぜながらという形で行われます。

・ロシア語初学者の場合、授業が始まる前に最低でもキリル文字の読み書き（ブロック体・筆記体）はできるようにしていきましょう。

・PC を用いてロシア語を書く授業があるので、日本でできるようならロシア語のキーボードに慣れておくことができるとよいと思います。

・最後のプレゼンテーションのときには、PowerPoint を使用することになります。PC はもちろんですが、それだけではなく USB も持っていくようにしましょう。（USB は様々な機会に役に立ちます）

・予想していたより授業内容は易しいし、3週間しかないのでもそこまで難しくなる範囲までは進まないと思いますが、ロシア語未履修であれば独学である程度は勉強しておくことを勧めます。教科書は支給されますがこれも英語のテキストなので、日本のロシア語文法書を持っていくと便利だと思います。辞書は露和と和露両方用意しろと言われると思いますが、和露はあんまり必要ないです。

3. 寮での生活について

・トムスク国立教育大学の寮で生活します。授業の行われる建物の正面に位置しているので、通学は徒歩一分といったところです。

・寮の部屋は基本的に二人部屋か三人部屋ですが、人数の関係でひとり部屋（二人部屋をひとりで使う）になったりすることもあると思います。日本人同士が相部屋になるので、安心といえば安心なのかもしれません。

・部屋のインターネットは有線（ケーブルは部屋にもありますし、大学でも貸してくれます）でのみ使うことができます。ただし差込口がひとつしかないので、同時に使うことはできません。同室者と上手くやっていく必要があります。

・洗濯機はある部屋とない部屋があります。手洗いでいい、くらいの気持ちで行った方がいいかもしれません。

・寮は本当に汚くて、設備も不十分なので持っていける生活雑貨はなるべく持っていった方がいいと思います。ただ近くのスーパーに日用品は売っているので、消耗品については心配ないです。洗濯物干しや除菌シートを持っていけばよかったです。また、室内は暖房が効いていて暖かいですが、部屋によってはそれでもまだ寒いことがあるので、可能なら電気毛布を持っていけばよかったですと後悔しました。

4. 食事について

・水道水は飲めないなので、必ずお水は買うようにしてください。ただし、安い水は沸かせば問題ないですが、生水として飲もうとすると美味しくありません。

・調理場は寮の中にあるのですが、調理器具は自由に使えるものがないので自炊をしたいなら調理器具を持っていくか、現地で調理器具を買うかしたほうが良いと思います。

・私が生活していた部屋は電気ポットと電子レンジがあったので、温かい飲み物やスープ、買って来たパンやおかずを温めることには困りませんでした。

・スメタナと呼ばれるサワークリームに代表されるように、ロシアの乳製品は極めて美味しいです。あれこれ試してみると面白いと思います。

・カーシャというオートミールの仲間も、(好みは分かれるとは思いますが)ほんのりと甘くておいしいです。大学食堂でもたまに食べることができます。

・私にはロシア料理はとても美味しく感じられたし、毎日外食でも物価が安いので経済的に困りはしませんでした。寮にキッチンがありますがロシアのキッチン設備は使い方が難しくてあてになりません。自炊しても近くのコンビニでパンとフルーツやヨーグルトを買って食べるくらいだと思います。部屋には電子レンジや冷蔵庫、電気ケトルがあるのでお惣菜を買ってきて温めなおすくらいはできると思います。

5. 現地の学生・地域の方々との交流について

・現地の大学生には、英語を話せる人が多いわけではないので、英語を話せるからどうにかなるでしょうという甘い考えは捨てていった方がいいと思います。ただし、外国部学部の学生はかなり英語が上手です。

・大学食堂で働いている女性たちは、ロシア語であれこれ話しかけてくれます。なるべく(たとえロシア語がよく分かっていなかったとしても)話をしようと努力すると楽しいと思います。食べ物の名前も覚えられます。

・街のロシア人はとにかく無愛想だし、レストランやスーパーの店員ですら冷たい感じがするので最初はとても怖いと思いますが、そのうち慣れます。大学の学生はわりと優しいです。交流会で日本語を学ぶ学生と仲良くなると、色んなところに遊びに連れて行ってもらえるので是非積極的に友達を作ってください。日本のお菓子とか雑貨とかお土産を持っていくと喜ばれます。人によっては帰りの空港への送迎も手伝ってくれます。最終日に私は4人の友達が駅までお見送りに来てくれ、荷物を持つのを手伝ってくれたので助かりました。

6. お金について

・ロシアでは大きいお札は嫌がられることが多いです。銀行などで両替してもらおうと、どうしても1,000ルーブル紙幣や5,000ルーブル紙幣になってしまうので、多少レートが悪くなってしまったとしてもなるべくこちらの希望を聞いて細かいお金にも対応してくれる日本の両替業者を利用するのが良いのではないかと思います。

・クレジットカードに対応しているお店も多いので、カードで支払えるところは（レートも良いですし）全てカードで支払ってしまうのも良いかもしれません。

・5~6万円準備していけば十分だと思います。

・私はモスクワの空港で両替したので日本で両替するよりレートがだいぶ良く、1ルーブルが1.6円くらいで替えられました。トムスクの研修だけなら登録料の他に4万あれば十分生活できると思います。少し贅沢してもまかなえます。ロシア人は細かいお金が大好きなので小額紙幣や硬貨が沢山あると便利ですが、5000ルーブルでも大きなスーパーでは崩せるので大丈夫です。あとロシアはカード社会なのでクレカがあるととても便利です。

7. その他

・日本語学習者やロシアの友達と連絡を取る機会が多くなるので、Wi-Fi ルーターを持っていったり、SIM フリーの携帯電話を持っていったりすると、不自由なく連絡できるかもしれません。

・日本から何かプレゼントを持って行って、ロシアでできた友達にあげるととても喜んでくれます。

・とにかく交流会で友達を沢山作れるかが留学を充実させられるかの鍵だと思います。ロシア人は親しい人にはとても優しく親切でユーモラスですが、そうでない人にはなかなか冷たいです。ロシア人の話すロシア語は本当に聞き取れないので、レストランに入るにもロシア人学生と一緒にの方が絶対心強いです。人によってはお家に招待してくれて、異文化体験できてとても楽しいです。

National Taiwan University (台湾)

1. 出発前について

・HSKを受けて自分の現在の学力の水準を把握したりガイドブックを買って最低限知っておくべきことを確認したりしていました。

2. 授業について

・到着二日目に先生たちとの面談があり、スピーキング・リスニング・リーディングのスキルでクラス分けが行われ、総勢 21 人が 1 クラス 5 人前後で構成されました。先生は台湾大学の院生さんで歳も近く気軽に話しかけられる存在でした。私のクラスの授業は繁体字と英語で書かれた教科書を使って基本的な文法を確認しつつメインはスピーキング・リスニングのスキルアップでした。50 分×3 コマを平日の午前中に行い、ほぼ毎日宿題と小テストがあり、中間試験と期末考査としてプレゼンテーションの発表がありました。中国文化の授業は午後に週 3 くらいの頻度で 2、3 時間行われました。英語での授業では台湾の博物館について学び、中国語での授業では台湾の文化について学びました。

・先生方と相談して上のクラスに変更してもらった人もいた。授業は全部中国語で行われたが、理解できなかったところは先生がやさしい中国語で教えてくれたり、英語やスマホを使ってくれたりしたので困ることはほとんどなかった。予習復習はもちろん、毎回課題が出された。私のクラスではテキストを音読したものを録音してメールで送る、250 字で作文を書くといった課題がほとんどだった。慣れないうちは一つの課題に 2～3 時間かかり大変だった。

3. 寮での生活について

・宿舎は台湾大学から歩いて 25 分くらいのところにある台湾師範大学のゲストハウスでした。ホテルみたいなところだと思ってもらって結構です。毎日ルームメイキングが入り、バスタオルやタオルなども支給されました。ホテルと違うところは朝ご飯が食券を使って近くのハンバーガー屋さんかカフェで食べるという点くらいです。1 階にはコンビニやサイゼリヤなどがあり、雨の日で遠出したくないときにそこで食事を済ませられたのは便利でした。ゲストハウスの会議室を借りて皆で勉強したり、晩ご飯を一緒に食べに行ったり、夜は皆でコンパをしたりするなど、3 週間で日本各地から集まった大学生と仲良くなることができました。

・3 人部屋で申し込んだが、現地に行ったら人数の都合で 2 人部屋にされていた。日本のビジネスホテルのような、とてもきれいで広い部屋だったので快適に過ごせた。上の階に音楽系サークルの練習室があるらしく、毎晩音楽が聞こえてきた。洗濯機・乾燥機はそれぞれ 1 台ずつしかないうえに 1 回 1 時間かかるので、使いたいときに使えないことが多かった。



4. 食事について

・朝ご飯はハンバーガー屋さんかカフェで済ませました。昼ご飯は台湾大学周辺のお店を現地の大学生や先生に教えてもらって食べに行きました。外で食べても日本円に換算すると350円前後で済ませることが出来ます。夜ご飯は師範大学近くの夜市（師大夜市）や行った観光地にあるレストランなどで済ませました。台湾は色んなアジア料理がお手頃価格で食べられるのが大きな魅力だと思います。基本的にどの料理もとても美味しかったです。ただし生野菜を食べるのには抵抗があったので野菜と果物摂取には苦労しました。

・授業がある日は大学の近くの店で、夜はゲストハウス近くの夜市などの屋台で食べることが多かった。屋台の料理は手軽で安いため、忙しくて食べに行く時間がないときによく使った。「素食」と書かれている料理は野菜中心の料理なので、野菜が食べなくなったときには「素食」を探した。スーパーやコンビニに行くと日本の食品やお菓子がたくさん売っているので、万が一台湾の料理が体に合わなくてもなんとかなると思う。

5. 現地の学生・地域の方々との交流について

まず台湾に到着して台湾大学の学生（Student Adviser）が迎えてくれるのですが、彼らは皆英語が堪能でそれに驚きました。中には日本への留学があったり日本文化が好きなあまりに日本語も堪能な Student Adviser もいて困ったときにはよく頼りにしました。台湾はよく日本人が観光で訪れるせいか、街を歩いているだけでも日本語や英語の話せる人が多く、日常生活でも困る場面は少なかったです。現地の人とでは台湾大学の学生が一番多くコミュニケーションを取った相手ですが、次に多く取った相手としてはタクシーの運転手だと思います。ただし人によってはなまりが強く聞き取れないこともしばしばありましたが、それはそれで面白かったです。

・台湾大学の Student Adviser の方々はみなとても親切だった。彼らのほとんどが英語に堪能で、日本語を話せる人も何人かいたので、コミュニケーションで困ることはなかった。個人的に仲良くなった人と休日に遊んだり、ご飯を食べることもあった。

6. お金について

日本円で5万あれば足ります。私は不安だったので8万持って行ってそれを一気に空港で換金したのですが周りの友達是最初数万円換金して足りなくなったら換金、もしくはカードで支払いを済ませていました。たまにカードが使えない店がある点は注意です。また、最初に Easy Card というものが台湾大学側から提供され、日本でいう Suica のようなものでチャージしなければならないのですが、使い切れるくらいのチャージ金額にしましょう。300元最初に入れば十分かなと私は思います。EASY CARD は台湾内での身分証明書（表面が学生証、裏面が Easy Card）になるので常に持ち歩くようにして下さい。

・ゲストハウスはいちばん安い3人部屋で申し込んだのに、チェックインしたところ2人部屋になっていて予想以上の出費になった。3人部屋は7～8万円、2人部屋は10万円

程度。部屋代は現地で現金かクレジットカードを使って支払うことになっていたが、対応していないクレジットカード会社があったらしく、仕方なく現金で払う人もいた。私はクレジットカードを持って行ったが、3回くらいしか使わなかった。食費、交通費は日本よりかなり安いと感じた。食費、お土産代、交通費などを合わせると私は4～5万円ほど使った。台北市内に銀行はたくさんあるが行く暇がほとんどないので、台湾の空港でまとめて日本円を替えるのが最も楽だと思った。

7. その他

ちょっと田舎めいたところの公衆トイレはトイレットペーパーがないこともあるのでティッシュは持ち歩くようにして下さい。台湾大学のトイレのうち、入り口に大きなトイレットペーパーが置いてあって個室に入る前にそこで取る（つまり個室にトイレットペーパーがない）というものがあるので気をつけて下さい。

- ・水道水を直接飲まないようにしましょう。歯磨きには使えることには使えますが、最初の数日間はお腹が緩くなる症状に友達と悩み原因はそれではないかと私は思っています。台湾人は皆よく水筒を持っています。大学にもゲストハウスにも無料で飲める冷水・熱湯器が設置されていて皆それを利用しています。荷物に余裕があったら水筒を持っていくのも手かもしれません。

- ・YouBike という公共の自転車貸出サービスを格安なので多くの学生が利用していました。雨の日はタクシーをよく使いました。皆で割り勘すれば師範大学から台湾大学間が100円もしません。たまにぼったくるタクシーもあるので注意しましょう。

- ・予想以上に昼夜の寒暖差が激しいので体調には気をつけて下さい。

- ・中国語学習を目的としたプログラムであったが、英語の必要性を強く感じた。

編集後記

留学とは、専門知識や外国語の学習をはじめ、外国の生活と文化の体験でもある。ただ、留学はそれだけを意味するわけではない。「世の中には様々な価値観や考え方、見方が共存している」ことを理解する機会である。それは、外国と自国という関係に当てはまるだけでなく、一人の成人としてこれからの社会生活においても必要なことだろう。

自分とまったく同じ価値観や習慣を持っている人はいない。人と一緒にやっていく中で、意見の違い、やり方の違い、価値観の不一致などは、仕事においても、家族との生活においても、友だちとの交流においても普通に起こることである。そんな時必要なのが、留学で得られるような能力ではないだろうか。違いが出てきたからすぐ背を向けてしまうより、いろんな価値観の共存を認めたくらうえで、それを尊重しながらどのように調和させていくかを考える、それも一つの立派な能力であり、外国での生活は、まさにその能力の養いに適している。だからこそ、海外留学は非常に大事な経験であると私は信じている。

今回の春季短期研修に参加したみんなの、若くてありながら新世界に飛び込んだ勇気を心から尊敬する。そして、まだ留学の経験のない人も、大学生・大学院生だからこそ利用できるこの貴重な留学の機会をこれからぜひ使ってほしい。前より成長した自分を発見する楽しみが待っているはずである。

前アソシエイトフェロー
李京和 (い・きょんふぁ)

本報告書の編集では、最終工程から携わらせていただきましたが、留学に行かれた皆さんの乗り越えられてきた困難や楽しい思い出、そして今後の抱負など様々な貴重な経験から私も学ばせていただきました。大学生の今だからこそ、出来る経験というのはあると思っています。今回の短期留学に参加された皆さんの中には、一度も海外に行ったことがなかった学生もいましたが、「留学に行こう！」と決心したその勇気が今後の生活においても非常に役に立つことだと思っています。今回の経験や身に着けた知識を思い出として残すだけでなく、今後の自分自身の将来のために役立てて頂ければ幸いです。この先は、長期留学や海外への就職など、様々な場で今回得られた経験を活かしていただきたいと思います。また、これから留学に行こうと思っている皆さんにとって、この報告書は非常に貴重な資料となることは間違いないです。先輩たちの貴重な情報を活かし、有意義な留学生活を送っていただければと思います。私にとっても、今後の短期留学の企画や実施において大いに参考になる貴重な報告書となりました。

アソシエイトフェロー
松田デレク

